黒い名刺に気を付けろ！【バイト編】

牡丹えび

第一話

　バイト先の上司に呼び出された時、鷺沼智（サギヌマサトル）は既に内容を察していた。
「鷺沼くん、悪いけど今日限りで辞めてもらえるかな」
「わかりました」
「え、いいの？」
「苦情が来たんですよね。内容は察してます。店の評判を落とすわけにはいきません」
「あ、有難う……」
　唖然とする上司に頭を下げて、机に置かれている今日まで働いた分の給与を貰って智は事務所を後にした。
「これで九件目」
　呟くだけで溜息も出ない。
　智は何も過失をして辞めさせられるわけではない。むしろ彼は社員よりも働く凄腕のバイトだった。人付き合いもよく、周りから妬まれることはない。
　ただ、問題なのは彼の容姿。
「・・・・・・」
　水溜りに映る自分の顔を眺め、これでは確実に中学生、いや悪くて小学生に見えるだろうと嘆きたくなった。
　小学生の頃、智は身長が一番大きかった。中学生でも中くらい。しかし高校生になると一番前になった。更に、その顔はベビーフェイスなどと言う可愛らしさでは収まらないくらいの童顔。
「鷺沼が女の子だったら一発で惚れてるわ」
　と、同級生にからかわれるくらいの可愛い顔。
　この顔が憎いわけではない。今どきは可愛い男は需要がある。しかし、可愛いのと童顔が合わさればいい効果は期待できない。
　高校生になってバイトを始めて連続九件、同じ理由で辞めさせられている。
　働く智を見ると客たちはみんな「どうして中学生を働かせているんだ」
　などと苦情を言うのだ。
　日の当たらない場所でのバイトも試みたが、やはり同じように言われて駄目だった。
　次男坊の癖に自立心の強い智は金銭面は出来るだけ世話になるまいとバイトを探しては辞めさせられ、それを繰り返している。
「兄さんに馬鹿にされる」
　弟に過保護な兄はバイトなんかしなくてもいいと毎回言う。それが智には煩わしい。
　少し気分が重いと視線を落とす。足元に黒い長方形の何かが落ちていた。
　普段は拾わないが、何故か好奇心が駆られてしまい手にとると、それは黒い紙らしく、ひっくり返すと何か書いてあった。
「名刺か……？」
　黒い名刺なんて珍しいと、血文字のようなおどろおどろしい文章を読み込む。

名刺には「これを拾ったアナタ。運命に導かれましたね……？なんじゃこりゃ」
まるで悪徳勧誘のような文句の下に、「金融会社スチャラカぱらだいす」と書いてあった。
「あほくさい。捨てるべし」
ゴミ箱は何処だと歩こうとした時、智の身に異変が起こった。
「ん？」
足が、自分の意思で動かない。
初めての感覚に智は理解が出来なかった。しかし何事にも動じることなかれという信念があった彼は、少し戸惑いながらも足が進むままに身を任せることにした。
上半身は自由に動くので、危なくなったら電柱にでもしがみついて誰かに助けを求めればいいと軽く考えている。
「何処に連れて行くつもりなんだ」
歩く速度は速いが一定で、周りから見て不自然な動きもしていないから強制的に歩かされているとは誰も思わない。明日は筋肉痛かなと思ったのは二駅以上歩かされた時で、名刺を投げ捨ててはどうかと試みもしたが出来なかった。
「ここは、幸寿地区じゃないか」
都市で一番の歓楽街で、未だ智には縁がないところだ。
その中心地を見事に擦り抜けて足は進み、タフな智でも流石に疲れてきたと息が切れてくる頃、足が止まった。
見上げてみると、影を吸い込んだように黒い建物だった。看板には「金融会社、スチャラカぱらだいす……」
ぜーぜー息を切らして呟いた智は手から名刺が落ちたことに気付かなかった。
「つ、疲れた……」
「ご苦労様、智。そしていらっしゃい」
誰の気配もしなかったのに後ろから声をかけられて、思わずびくっとした智は振り返って少し目を見張った。
「初めまして。こんなに可愛い子だとは思わなかった」
鈴の鳴るような声と言う、そんな表現がぴったりの美声。そして文句がつけようのない整った柔らかい、しかし男らしい美形の青年が智に微笑みかけていた。
彼は智の視線に表情を崩さず、落ちた名刺を拾って胸元のポケットにしまった。
「バイト、経理だけどいいかな」
「……資格はありませんが」
智は普通科なので商業関係には明るくはない。
「じゃない。あの、あなたは誰ですか」
事の次第をつぶさに訊いてみたい欲求を抑えて、先ずは基本的なことを訊くことにした。青年はああと頷く。
「自己紹介が未だだったね。社会人として何百年もやっているのにこれではいけないな」
歳をとっていて二十代後半にしか見えない青年は咳払いをした。

「改めまして。金融会社スチャラカぱらだいすの社長をしています。神坂築（カミサカキズク）です。宜しく、鷺沼智くん」
　どうして自分の名前を知っているのか、そもそも何故こんなところに自分はいるのか、智は何もかもが自分の許容範囲を超えていると頭がショートしそうになった。
「大丈夫？」
「心頭滅却すれば火もまた涼し」
「は？」
「混沌とした社会でも常に平常心でいれば乗り越えられないことはない。常に落ち着くんだ、と僕はこの言葉を超訳しています」
「あ、……そうなんだ」
　神坂は珍しいものを見るように何処の国の人間かわからない、紅茶色の瞳を瞬かせた。
「取り敢えず、今日は帰ってもいいでしょうか。ここから僕の家に帰るまでには結構あります。つく頃には夜になっているので今からお話を聞くのは困ります」
「あ、うん……、そうだね……」
「僕を雇ってくださるんですか」
「そのつもりなんだけど、君ってなかなかやるね……」
「名刺によると、僕は運命に導かれたようなので、そちらのお気に召す人材なのでしょう」
　何処で話をするかと問うと、神坂はやや間抜けな声で目の前の会社の中でしたいと言う。
「では、明日四時くらいでいいですか。学校が終わってから行くとそのくらいになります」
「うん、宜しく」
　失礼しますと神坂に頭を下げて踵を返した智は、自分の意思で足が動くことを確認していた。
「今日は不思議な日だった」
　常人からすると不思議の一言では済まされないが、智の中ではたったそれだけの出来事にしか過ぎない。
　彼は感情や感動が薄いとか、そういった人間ではないのだが、兄が感情豊かで感動深い人間なためにそれを見てきてうんざりしているので、そういう人間にはなるまいと自分を律する能力が強すぎるだけだった。
「兄さんなら腰を抜かしてるな。いや、途中で失神しているか」
　今日のことは誰にも言うまいと、智は胸に誓った。
　よかったのは仕事先が直ぐに見つかったことだ。履歴書の提出については何も言われなかったが、一応書いておく必要はあるだろう。写真も取り置きがあるので問題はない。
　少々怪しい会社だが、とスマートフォンを取り出してネット検索をかけてみる。
「金融会社スチャラカぱらだいす。社長、神坂築。社員、資産、……評判も悪くない。金融業って言うのが多少は気になるけど、他はいたって普通の会社だな」
　今の時代、スマホと言う強い味方があるので情報の収集には事欠かない。調べて胡散臭かったら明日は行かないで行こうと思ったが、社員ブログなどもあるし、思っていたよりは怪しくはない。

だが、最初から何処かおかしいという基本的なことは智の認識には不思議なことにない。
生きていればたまに変な事もあるだろう。そんな、軽い認識。
弱冠にして智は今の混沌とした時代を生きる人間に不可欠な柔軟さと、尊いほどに何事にも動じない必要以上の許容範囲の広さを持っている。
「制服で行った方がいいかな」
暢気に考えながら、最寄駅は何処だろうかと案内板を見ながら道を歩いていた。
帰り道、補導されかけたのでそれは流石に足早に逃げた。

第二話

　金融会社スチャラカぱらだいすは、普通の会社だが何処か違っていた。
「みんな、挨拶して〜」
　時間になったので足を踏み入れると、神坂が声をあげて社員の視線が全員、智の方に向いた。
「自己紹介、あいうえお順ね」
　元気な掛け声とともに順々に挨拶をされ、智もペコペコと頭を下げて回ったが、その社員たちの全員が洩れなく美形だった。
　例を挙げると東南アジア系のエスニックな妖艶美人の蘭林香（ランバヤシカオリ）、まるで氷をまとっているような目が覚める北欧系の色彩を持つ麗人の雪嶋雪人（ユキシマユキト）など。
　社長の神坂の他には受付と人事担当のこの二人が主に駐在していると言う。
「智はこんなに可愛いけど高校生なんだよ。人間で言うと立派に勤労が出来る大人なんだ。みんな、そのつもりで」
　美人美形ばかりだが、気取ったところはなく雰囲気がいい。何の取り柄もない、十人並みの容姿の自分を雇うのだからもっと召使のような目で見られるのかと思ってもいたが杞憂だったらしい。
　智は安心して勧められた席についた。
「この本、探したんだよ。色々と仕掛けがしてあるから楽しく経理が学べるよ」
　神坂が自慢するように差し出してくれた本は、炭を塗ったかのように真黒かった。パラパラめくっても何も書いていない。
「読む前に気合いを入れないといけないんだ。これ、ちょっと癖があるから」
　デスクに置いて、気合いとはどういうことかと試しにバンっと手のひらで叩いてみた。
「おお〜……」
　すると、炙り出しのように血色の文字が滲み出てきて、表紙に「楽しく学べる経理の基礎」と記されていた。これには智も少し感動したので何回も叩くと「智、死んじゃうから」
　苦笑した神坂に言われて渋々やめた。
「最近の人間ってみんなこうなの？えらく適応能力がありますね」
　数日後、智が経理を勉強しながら実務をこなしていると、見ていたやや軽そうな外見をしているが、はやり美形の遠藤円（エンドウマドカ）がその働きぶりに口笛を吹いた。
「それは俺も思った。智くんの周りも君みたいなの？」
　中年の色気がふんだんに出ているダンディーな御厨剣（ミクリヤツルギ）に問いかけられ、智は少し考えて首を振った。
「僕の兄だったら間違いなく失神しているレベルだと思います」
「は、ハッキリ言うんだね……」
　社員なのに何処か怯えているような楚々とした麗人の近江近衛（オウミコノエ）は、遠藤から気が弱く人見知りなのだと聞いていたので特に嫌な気分はしなかった。
「まあ、ハッキリと言いますよ。皆さんは何となく、自分たちのことを人間ではないような言い

方をするので」
　智が率直な感想を漏らすと、周りは明らかに息を飲んだ。
「冗談です」
　本当はそんなことは微塵も思っていないが、智は今後のためにフォローしておいた。
　真面目で仕事さえしてくれれば人間だろうと何だろうと構わないと思っているのが仕事に対する智の信念だった。
「大した神経だ。社長、いい子を捕まえましたね」
　思わず御厨が手を叩き、「ホネノある子はダイスキヨ〜」
　蘭林が意味深な視線を送ってくる。
「俺の予想以上だな。よし、決めた」
　席を勢いよく立ち上がった神坂は智のデスクに手をついた。智は危うく電卓のキーを間違えて叩くところになり、思わず内心で舌打ち。
「智。君、俺の恋人になりなさい」
　唐突に言われて智は眉をぴくりとあげた。
「……何故ですか。あと、本をもう一冊広げたいので手をどかしてください」
「智が好きになった。君なら本当の俺を知っても、その広すぎる心で受け止めてくれることだろう」
「僕の心は広いですが、生憎と異性愛者です。社長がいくら美形でもお断りします。そして、手をどかしてください」
「俺も男は初めてだが勉強すればなんとかなると思う。この世界は勉強道具には事欠かないから安心してくれていい」
　任せろと言われたが、「聞いてるんですか。僕は社長と付き合う気はないので勉強とかしなくていいです。それよりも手をどかせと言っているんですが」
　智は取り合わず内心苛つきながら手を睨み付ける。
「仕事と恋愛はどちらが大事なのかな？生まれたからには運命の恋をしてみたいとは思わないか？陛下も言っている、恋こそ全ての快楽に繋がっているとっ！」
「いい加減にしろ！」
　高らかと謳うような神坂に、初めての仕事で悪戦苦闘していた智は遂に声を荒げた。
　神坂を始め、社員全員が驚いて智を見詰める。近江など泣き出しそうだ。
「仕事と恋愛なら、今は仕事が大事だ。職場に来ている以上、お金を貰っている以上、それに見合った労力は奉仕する。それが社会人の基本だ。あんたは社長だろ。社員のやる気を殺ぐようなことをしていいと思っているのか。立場を弁えろ！」
　一気にまくし立てた智は神坂が思わず手をどけたスペースに本を広げた。そして仕事を再開したが、周りが妙に静かなのでこれはやりすぎたかと目をあげた。
「あの……」
「凄い！」
　遠藤が声をあげ、続いて御厨も同じことを言った。

「凄いですね、智くん。社長にお説教なんて、初めてですよ……」
　近江はどうやら感動で泣きそうになっているらしく、手を叩きながら智を讃える。
「シャチョはぼんぼんダカラ、初めてオコラレルんじゃない？」
　蘭林が甲高い声で笑い、「智くんは社会人の鑑だね。僕も頑張りたいな」
　雪嶋は少し照れたように美貌を綻ばせた。
　社員の反応はいいが、神坂はどうだろうかと目を向けると、「・・・・・・」
　案の定、神坂は難しい顔をしていた。
　またしても失業かと智が溜息をつくと、「俺は真面目に智を堕としたくなってきた」
　何を言うかと思ったら神坂は神妙な顔でそんなことを言う。
「結婚式は日本風に神道かな」
「……現在の憲法では男同士は結婚できません」
「俺の国に行こうよ。陛下に拝謁して許しを貰おう」
「……どの国か知りませんが、僕は男とは付き合いません」
　仕事の邪魔だという雰囲気を出すと、神坂はあっさり引き下がった。
「邪魔すると嫌われちゃうからね。俺は智に好かれる努力をすることにするよ」
　ニコニコしている神坂を見て、無害ならどうでもいいと智は仕事に没頭し出した。
「ちょっと出てくるね」
　数分後、神坂がそう言って会社を後にしたのも智は気付かなかった。そして戻って来たのにも気付かなかった。
「社長、そのＣＤと本の山どうしたんですか？」
「これは智と安全に夜を過ごすための教材」
「はい？」
　遠藤と近江がそれぞれ大量のＣＤを覗き込み、雪嶋が文庫本を手にとり、御厨が漫画本を眺めた。
　瞬間、「うわぁぁぁあああああああっ！」
「いやあああああああぁぁぁあああっ！」
　静寂を切り裂くような悲鳴があがって、仕事の世界にいた智でも凄い勢いで声のする方を見た。
　雪嶋が何故かいなくなっていて跡には大量の氷が残っていたが、近江は顔を真っ赤にして座り込み泣き出し、遠藤は壁に寄りかかりぐったりとして、御厨は洗面所に駆け込んだようだった。
「な、なんですか皆さん……」
　受付にいて出遅れた蘭林と仕事中だった智は恐る恐る近寄って行き、平然と片付けをしている神坂の持っているものに注目した。
「ニンキ声優がイカされてアエグ、トッテオキノびーえるＣＤ……？これなんですか、シャチョ」
「……【流行の体位全て図解で見せます。男同士のエッチで最高の快感追求】……」
　蘭林も智も、本能で内容は見ない方がいいと思った。しかしＣＤを一枚セットした神坂は「百

聞は一見に如かずっていう言葉があるらしいよね」
　音量を最大にして再生ボタンを押した。
【いやだ、やめてっ！そんな太い〇〇〇なんて入らないっ！】
【そんなこと言いつつ、下の口は喜んで銜え込んでるぜ？】
【あっ、あああんっ！はあぁぁあんっ！】
　などなど、自主規制がかかるくらいの、男同士のあれこれがボイスドラマで繰り広げられている。
　蘭林は衝撃でその場に倒れた。
「会社を何だと思ってる！いっぺん死んで来いっ！」
　智は神坂の顔面に思い切り電卓を投げつけて失神させた。

第三話

　神坂が智のためにＢＬ、つまりボーイズラヴという男性同士の恋愛について勉強し出した。
「思えば、俺とおうめも男同士だった」
　遠藤と近江が付き合っていることをカミングアウトされた智は、「そうなんですか」
　ただ一言で済ました。
　初めの時の衝撃で社員全員引いてしまったが、神坂はヘッドホンをするという確約をしてくれたので誰も気にしなくなった。視覚の暴力にもなるので度肝を抜くような表紙のものはブックカバーをかけてくれると言う。
　ただ、雪嶋がしばらく出社拒否をしたのでその説得を任された智は、「雪嶋さん、僕がいる限り社長の好き勝手にはさせません」
　少し面倒だなと思った。
「時に智。税務署に出す書類だけど」
「もう少しで制作できると思います。出来次第、お抱えの専門家に持って行ってください」
「うん、有り難う。でもね、うちはプロには頼んでないんだ。智と同じ、アルバイトに頼んでるの」
　もしかしたら知ってる人かも、と言われて智は小首をかしげた。税理士に知り合いはいない。
「未だ身分は学生なんだよ。智と同じ高校の、商業科なんだよね」
「うちの商業科ですか」
　智の学校の商業科は全国でも屈指のエリートが揃っている。しかし、難関の資格試験に受かったという情報は聞かない。
「実はもう直ぐ来る予定なんだよ」
　蘭林がお茶を用意した丁度の時間に、「時間を無駄にしないねえ。いらっしゃい、いかちゃん」
「時は金なりと言うだろう」
　自動ドアから現れたのは「小ヶ谷先輩……」
　商業科のエリート中のエリートで美形ハーフと有名の小ヶ谷リイカ（オガヤリイカ）だった。
　小ヶ谷は薄いベージュ色の髪の毛を普段のように結っておらず、肩から流しており、服装も制服ではなくスーツだった。その姿は何処から見ても高校生ではなくホストだ。
「私を知っているのか？」
「同じ高校の普通科にいます。鷺沼です」
　グリーンの瞳が智を見詰め、そして彼は一つ溜息をついた。
「神坂。お前がショタコンだったとは思わなかった」
「嫌だな、いかちゃん。智はショタじゃないよ。どっちかって言うとロリコンだよ」
「鷺沼は男だからショタコンだろう。……無駄話をしたくはない。さっさと仕事を寄越せ」
　小ヶ谷が仕事と言うのだから経理のことだろうと思ったが、書類は未だ出来ていない。智が口を開く前に神坂が分厚い紙の束を小ヶ谷に差し出した。

「今月は多いよ。いかちゃん先月休んだからペナルティーね」
「……あいつが誕生日だったからいけないんだ」
「いかちゃんも恋人には弱いよね」
「恋人じゃない。食料。言わば、えさだ」
　小ヶ谷が不機嫌そうに髪を掻き上げながら書類を見て、お茶を飲む。
「雪嶋。どうして御厨の対象が私に回ってきているんだ」
「そ、それは……、御厨さんが空は小ヶ谷さんが適任だろうって仰ったので……」
「怠慢だな。あのじじい」
　金融会社に空が何の関係があるのだろうか。
　智は小ヶ谷がぶちぶち漏らす不満を聞きながら、この会社は本当にただの金融会社なのだろうかと真剣に疑問を持った。
　人間離れした美形の社員と言い、周りより年下のはずの小ヶ谷が社長や他の社員を同年代かその下のような口ぶりで話す。
「察しがいいな、鷺沼」
「心でも読めるんですか」
「あながち、外れではない。人間でその神経は褒められたものだ。しかし、子供のうちからそれでは生きにくいぞ」
「先輩とは二歳しか歳の差がありませんが。書類上は」
　書類から目をあげた小ヶ谷はくすくす笑い出した。
「拾いものだな」
「そうでしょ。いかちゃんもいいと思うでしょ！俺、智にベタ惚れなんだ」
　自慢するように神坂は言うが、本当のところ智にはあまり意味がわからなかった。
「いかちゃん。智が経理だから協力してあげてね」
　小ヶ谷は頷かなかったが面白いと言うように少し表情を崩した。
「これが片付いたら連絡を入れる。それまでには仕上げておけ」
　王様然と言い放った小ヶ谷は颯爽と帰って行った。
「いかちゃんは俺の親友なの。幼馴染みなんだよ。恋人が出来るまでは身体が不安定で心配してたんだけど、やっと調子がよくなってまともに歩けるようになったから安心したよ」
　恋って偉大だよねと神坂はデスクに頬杖をついてにこにこしている。耳は先ほどからヘッドホンをつけっぱなしだ。どうせいかがわしいボイスドラマでも聞いているのだろう。
　智は学校で聞く小ヶ谷のことを思い出していた。
　美形で有名な小ヶ谷に恋人がいるとは初耳だった。それに、彼が体調が悪いだなんて聞いたことがない。校内で見かける小ヶ谷はいつも王様のように凛々しく、何処かが悪いだなんて思えないくらい隙がなかった。
「人は見かけによらないんだな」
「智が可愛い顔をして俺にはピリ辛なのと一緒だよ」
「あんたに甘くしたらつけあがりそうだ」

「へえ、自覚あるんだ？」
　顔をあげると神坂が後ろにいて、「……んっ」
　そのまま自然の仕草のようにキスをされた。
「・・・・・・」
　唇が離れても与えられた熱が引かない。
　触れてみると、そこには少ししか感じなかった他人の唇の感触が生々しく残っていた。
「……初めて、キスした……」
　智は呆然と呟き、周りは突然の神坂の暴挙に凍り付いた。
「ファーストキスが俺って、凄い光栄だね」
　何処までも脳天気な神坂は輝かんばかりの笑顔だ。
「シャチョ、やりすぎですよ、サスガニ……」
　普段は煽ってくるような蘭林が思わず突っ込みを入れ、「セクハラだよ、セクハラ！訴えられちゃうよ！」
　遠藤が頭を抱えた。
「恋人になるんだからセクハラとかないんじゃないの？」
「社長。未だ恋人ではないからセクハラです。しかも社内の勤務時間中に堂々とそういうことを、衆人環視でやられると言い訳が利きません」
　雪嶋が指摘する声を震わせた。
「さ、智……？」
　流石に神坂も事態を重くみたのか、ぶりっこをして智の顔を覗き込んだ。
「ご安心ください。僕は男だからファーストキスについて夢は持っていません」
　智の淡々とした言い方に、周りはほっとしたようだったが「それでも野郎とキスする予定なんかねえよ、馬鹿が！」
　次の瞬間、沸騰した湯沸かし器のような勢いで、神坂の顔面に拳をぶち込んだ。
「・・・・・・」
　周りは呼吸を忘れたかのように動きを止めている。神坂にいたっては至近距離からの暴行で避ける隙も、受け身をとる隙もなかったので見事にヒットして倒れ込み、失神している。
　その神坂の胸倉を、智は掴んで顔を近づけた。
「おい、あんた」
「・・・・・・」
「何処の国の何様か知らないが、ここは日本だ。雇用者を口説いてはいけないという法律はないが、いきなりキスしていいという法律もない。キスしてはいけないという法律もないが、あんただって社会人を自負しているのだから分別って言うものはあるだろ」
「・・・・・・」
「いきなりキスされてときめくのはイカれた電波か、おとぎ話の中だけだ。それに異性愛者は同性に唇にキスをされて大抵は嫌がる。僕も同じ心境だ。あんたの顔が素晴らしくよくたってな」
　智の凄んだ表情は失神している神坂はもちろん、社員たちにも見えない。

「何を調子に乗ってキスしたんだかわからないが、僕を振り向かせたかったらもうちょっとましなアプローチをかけろ。正々堂々、受け止めてやる」
　雪嶋が思わず、「智くんって男らしいですね……」
　などと感嘆した。
「だがな、今のキスであんたの株は急安値がついている。もうどん底だ。今のところ万に一つもあんたに惚れる状況はない。それを心しておけ」
「社長、聞いてた方がいいぞ～……」
　御厨がこっそり声をかける。
　そして最後に智は「しばらく自宅で仕事をさせてもらう。クビにでも何でもするがいい」
　言い捨てて、神坂を捨て、帰り支度を始めた。

第四話

自宅勤務を始めて数日、神坂からは何度となく謝罪の電話がきているが出社については無理強いはしないということなので、智は出社しなかった。謝罪にいたっては無視している。
　そんな時、「鷺沼。お客さん」
　声がかかったのでふと顔をあげると、「小ヶ谷先輩」
　制服を着こなした小ヶ谷が歩いてきた。
「今では違和感がありますね」
「話がある」
　スーツ姿の方が本当の小ヶ谷の姿らしい。そう伝えようとしても二の句を継ぐ暇もなく、智は小ヶ谷に促されるままに人気のない屋上へ向かった。
「神坂が不埒なまねをしたようだな」
「ええ、まあ」
「あいつは昔からお気に入りにはとことん入れ込むたちでな。一度目をつけたものは手に入れるまで徹底的に追い込もうとするんだ。鷺沼には未だ我慢をしている方だと思う」
「ただの変態じゃないですか」
　溜息をついた智に、「まあそうだな」
　小ヶ谷も異論はないらしい。
「しかし、あれでも私の唯一の親友だ」
「それは不幸じゃないですか」
「不幸だとも。そしてあいつはお節介だ。……認めたくはないが、幾度となく世話にもなっている」
　苦笑する小ヶ谷は何か思い出したのか、ふんわりと優しい表情になった。その変化に、智は同性ながら見取れてしまった。
「私たちは長く生きる。長く生きていると、たくさんのものに出会う。別れるのも同じ数だけ体験する。その中で、欲を失う」
　小ヶ谷は空を見上げた。
「それでも誰かをそばに置きたいと決心するのは生半可なものではない。神坂は軽い言い方をするが、鷺沼を選ぼうとしている。それを私は親友として応援したいんだ」
　空を映した小ヶ谷の瞳はとても深いグリーンで、彼の年齢が高校生ではないと明らかに伝えていた。そういえば神坂の自分を見詰める目も、時々こういう風に深くなるなと智はぼんやり思った。
「社長は、本気なんでしょうかね」
「くちづけは、神坂の一族では滅多にやらない行為だ。多分、あいつは初めてしたんじゃないか」
「え、うそ……」
　あれだけモテそうで経験豊富な雰囲気を出している神坂が、ファーストキスだなんて信じられ

なかった。しかし小ヶ谷が嘘を言うわけもなさそうだ。
　思わず唇に触れた智に、小ヶ谷は「これからは慎重にするように私からも注意しておく。だから、顔を見せてやってほしい」
　あれで意気消沈しているんだと、小ヶ谷は親友の様子を思い浮かべてにやっと笑った。
「先輩みたいなスマートな人だったら僕も考えるんですけどね」
　社長は仕方ないなあと智が冗談を言うと、小ヶ谷は軽く目を見開いて「そうだな。えさは一人に決めるというわけではないし、鷺沼ならいいかもしれない」
　何やら考え出したので智は驚いた。思わず後ずさると「神坂より私の方がいいのなら、私にしてみるか？」
　小ヶ谷が浮かべる微笑みが魔性を帯びた気がした。
「あの、……冗談ですよ、先輩」
　両手を挙げて小ヶ谷を制止しようとすると、屋上のドアが勢いよく開いた。
「リイカ！黙って聞いてればお前！」
「……ちっ」
「や、屋敷、先生……」
　養護教諭の屋敷徹（ヤシキトオル）が苦々しい顔をして飛び込んできた。
　智は保健室のお世話になることが殆どないのでほぼ面識はないが名前と顔はわかる。
「出てこないはずでは？」
「親友のために説得するからっていうだけならな。まったく、その気もないのにコナかけるのやめろっていつも言ってるだろ」
　小ヶ谷に文句を言ってつるんとした白い頬を引っ張っている屋敷を見て、智は二人の関係性についてだいたい察した。
「先輩、浮気相手には僕は役不足ですよ」
「当たり前だろ。リイカが子供を相手にすると思うな」
「先生、僕は一応生徒なんですが」
　苦笑する智に、立場を思い出したのか屋敷は頬を掻いた。気まずそうに咳払いをする。
「生徒でも、リイカは遊びが過ぎる時があるからな。危なっかしいんだ。それが可愛いんだけど。……おい、お前、授業は？」
　言われて、智は中央棟の大時計を見て慌てた。
「小ヶ谷先輩、今日は出社します。説得、ご苦労様です」
　ぺこっと頭を下げて教室に戻った。
「先輩なんだって？お前、なんかやったの……？」
　始業ぎりぎりで帰ってきた智を興味津々の同級生が質問攻めにする。
「小ヶ谷先輩ってなかなか友達思いだよね」
「え？先輩に友達？聞いたことないな。取り巻きはいるけど」
「俺は保健室で休んでるってことしかよく知らないや。謎だらけだし、あの先輩」
「そういえばさあ……」

　美形の小ヶ谷の話題は尽きないようで、教師が来るまで続き、自分から離れてくれたことに智はほっとした。
「先輩の恋人も男だったのか。意外と同性愛者、多いな……」
　ふむと考えた智は、「まあ両性の人を除いては世の中は男と女しかいないんだから、組み合わせ的には多くても変ではない。たまたま周りが男と男の組み合わせが重なっているだけだ。未だ二組に遭遇しただけで動揺していたら、これからのグローバル社会には対応できないな」
　柔軟性を見せて一人納得していた。
　そして学校が終わり、出社しようと道を歩いていると、けたたましいサイレンが鼓膜を打ち付けた。
「事故だって。男の人が撥ねられたらしいよ」
「なんか、もう助からなさそうって見てた人が言ってた」
　不吉なことを言う周りに嫌な気分になりながら歩いていると、目の前を何かが飛んで行った。
「……社長……？」
　何かに座る姿勢で、明らかに神坂が低空飛行で飛んで行った。
　紅茶色の長髪なんて神坂くらいだ。しかし、飛んで行っているのに誰も気付かない。
　智はその後を追いかけた。
「あら、これは死んでますな。こいつは確かうちの契約には死亡時、……生命の再生は入ってない。身体の欠損の保証だけか。ご愁傷様」
　救急隊員が蘇生を施している傍らでメモ帳のようなものを見ながら呟いた神坂は、持っていた棒を振り上げた。
「なんだ、あれ……っ！」
　神坂が振り上げた棒の先には大きな鎌がついていた。何百キロもありそうなそれを軽々と振りかぶった彼は、そのまま倒れている人間に向かって振り下ろした。
「・・・・・・」
　ＡＥＤが無情な音を出し、事故に遭った男性が亡くなったことを知らせた。
　その様子を神坂は見るか見ないかで、棒に乗って飛び立とうとした。智は思わず小石を投げた。
「いたっ。え、……智？」
「ちょっと、あんたなにしてるんですか！」
「待って。なんで智に俺が見えるの？今、俺は仕事中だよ？」
「仕事中だかなんだか知りませんが見えてますよ。と言うか、今何をやったんですか」
　智も神坂もパニックに陥ったが、智の方が一足先に正気に戻り「会社。早く行きましょう。説明してもらいますからね」
　取り敢えず社長はさっさと戻ってくださいと智は神坂をけしかける。
「あ～、俺がキスしたから、見えるくらいの魔力が移っちゃったんだね」
　開口一番、神坂は暢気に意味不明なことを言って智を悩ませた。
「社長って、死に神とかなんですか」

「おお。察しがよすぎておうめが失神したよ」
　遠藤に抱き留められている近江が気の毒になった。
「うちの会社の社員はね、全員魔物なんだよ」
　そして、金融会社スチャラカぱらだいすの本業は金融業ではなく、積み立てられる金で人間に化けて暮らしている魔物の欠損したパーツ、果ては命もさえ補うことを本業としていると言う。
　ちなみに、智が言った通り神坂は死に神。雪嶋はあんなに気が弱そうなのに実は冬の王で蘭林は蝶の魔物、遠藤は人狼、近江は吸血鬼、御厨は刀の魔物だと言う。
「いかちゃんは特殊でね、血が食料の吸血鬼と嫌血鬼（ケンケツキ）っていう血が大嫌いな種族のハーフ」
　ふんふんと聞いていた智は頭の中で状況を整理していた。
「ああ、うん。……取り敢えず、保険会社の凄い版を、人間に見える人間じゃない人たちがやってるってことですね」
「あっさり言うね……」
　心頭滅却ですよ、と智はもう自棄っぱちな気分だった。

「あー、やっぱり智は俺の見込んだ通りだった」
　神坂が惚れ惚れとした美声を震わせても、智はちらりとも見ずに仕事を続けていた。
「智くんの無視も堂に入ってるな」
「あれは耳栓してますよ、きっと」
　遠藤と雪嶋がひそひそと話し合っている。
「シャチョ、最近勉強シテルノ？」
　蘭林がちょっかいをかけると「してるしてる。やっぱりね、最初に慣らすのは指よりも舌の方がいいって。圧迫感的に。俺、そんなに舌は長くないんだけど」
「あら、じゃあ何処が長いノ？」
「ランランってえろいなあ」
　何を想像したのか神坂はにやけている。
「さ、智くん。本当に辞めないの？大丈夫……？」
「はい。これ以上ない最適な環境ですし、経理という新しいスキルも身についてきているので辞めるつもりはないです。辞めさせられたことは数あれど、自分から辞める理由は今のところありませんから」
　心配している心優しい近江からお茶をもらった智は受け取りながらそう答えた。
　そう、今までの労働環境の中で、残念ながらスチャラカは一番環境がよかった。デスクワークが初めてだからかもしれないが、元々身体を動かすのを得意としているわけでもないと言うことが今になってわかり、更に将来の選択肢も広がるかもしれない経理スキルも身につき、中でも電卓を叩く早さは検定試験を受けなくてもプロ並みになっている。昔ながらの帳簿にこだわっているこの会社では、ソフトに頼らないので電卓スキルも鍛えられるのだ。
「みくりんは沖縄に出張。錆びないといいなあ」
「人間の姿でも錆びるとかあるんですか」
「うん。みくりんのあの姿は幻影で、魔力があるものから見ると大きな刀がふわふわ浮いてるように見えるだけなんだ」
　想像するとちょっとコミカルだ。智はつい笑みを漏らした。それを神坂はにこやかに見詰めている。
「智って、本当に尊いよね。俺が人殺ししてるのに怖く思わないし、それどころか普通に喋ってくれるなんてさ」
「だって、社長の中ではあれは仕事なんでしょ？僕から見たら人殺しでも、社長の仕事には文句言いませんよ。社長は死に神なんだからやらないといけないんだし」
　怖がる必要はないと智が言うと「そうなんだけどね」
　神坂は苦みを含んだ笑みを浮かべた。
「俺ね、人間の知り合いがいたんだ。凄い昔なんだけど。その人は魔力をちょっと持っててね、この間の智みたいに俺が仕事してるのを見ちゃった」

　当時のことを思い出したのか、神坂は視線を手元に落とした。
「彼女は俺を人殺しって言って恐れたよ。近寄ることも拒絶した。視界に入れてもほしくなかったみたい。それが普通の対応なんだってわかってたけど、やっぱりさ。……俺もガキだったから辛かったな」
　愛おしいものを思い出すような神坂の横顔を見て、智は胸がキュッと締め付けられるのを感じた。
「……その女の人のこと、好きだったんですか」
　訊いてから、失敗したと思っても智は取り消さなかった。
　何故口を出てしまったのかわからないが、酷く切ない表情をする神坂が自分以外の誰かに恋をしたことがあるという過去に、嫉妬のようなものを覚えてしまったのかもしれない。
「さあ、どうだっただろう。物凄い昔のことだから、忘れちゃったよ」
　俺は智が初恋だよと、冗談めかして言う神坂は、もういつもの通り軽い男に見えた。
「ねえ、智」
「なんですか？」
「智ってモテないの？人間の女の子には、適応能力以前に智のずば抜けた包容力って魅力的じゃないの？」
「……この身長とこの容姿で包容力とかあっても全然いいことないですよ」
　ついふて腐れて呟くと、神坂はけらけら笑った。
「へえ。みんな見る目がないなあ！俺なんて智に初めて会った時から運命を感じたのに」
「男に運命を感じるなんて、社長も相当な酔狂ですね」
「そうでもないよ？この際だから言っておくけど、我ら魔物の世界はあまり性別は気にしないで恋愛をしているんだよ」
　どうやら魔物の世界の方が、恋愛については発展しているらしいことが発覚した。智は人間の世界よりも進んでいると勝手に感心した。
　しかし「なんと、魔王陛下の伴侶である女王陛下も男だからね」
　などと言われたら、魔物の世界の将来に不安を抱かずにはいられなかった。
「……跡継ぎとか、大丈夫なんですか。そっちの世界は」
「うん、平気。魔王陛下には子供が出来ないから。跡継ぎも自然と生まれる素晴らしいサイクルがあるんだ」
「便利ですね。少子化が叫ばれるこの世界に是非ともほしいサイクルですよ」
　だよねえと神坂は同意し、更に女王陛下が自分の親戚だという爆弾を落とした。
「社長ってぼんぼんだとは思ってましたけど、そんなに凄い家の出身なんですか」
「……智、どうして俺がぼんぼんだって確信してるの」
「その脳天気さはぼんぼんでしょ」
　指摘されて神坂はがっくり項垂れた。周りの社員からは爆笑が起こっている。
「……。俺ね、一応は死に神の家ではサラブレッドなんだよ。あとね、このスチャラカぱらだいすって言う会社は世界各国にあってね。会社の社長は代々死に神の一族がやることになってる

んだ。今の女王陛下の出身一族っていうこともあるけど、死に神は魔物の中では大貴族だからね」
「貴族云々は放っておいても、死に神にサラブレッドがいることにも驚きましたが、このふざけた名前の会社が世界規模の会社だと言うことに驚愕を隠せないですよ」
　智は電卓を叩きながら言うと、神坂も「この会社の社名については俺も思うんだよ」
　暗い顔でお茶をすすった。
「やっぱり智くんもそう思うよね。ほら、人間の智くんが思うんだからやっぱり変なんですよ。この会社の名前……」
　雪嶋が落ち込んだ様子で溜息をついた。
「いや、でもありですよ。多分……」
「智くん、無闇に慰めをかけてくれなくてもいいよ。俺は配属が決まってからしばらくは本当に恥ずかしくて社名を口にすることが出来なかった」
　遠藤はよほど慣れるまでに時間が要ったのだろう、苦悩も深そうだった。
「社名は誰が決めたんですか？」
「ソレガわからないのよ。シャチョも知らないの」
「うん。女王陛下か魔王陛下なら知ってるかもしれないけど、あの二人には滅多に会えないし、会ったら会ったでそんなくだらない質問していいのか、この俺ですら悩んじゃって結局訊けず終いなんだよな」
　たった一社の命名理由が、まさか一つの世界の王様たちに訊かないとわからないなんて、凄まじい世界だ。智はちょこっと気になった。
「……人間の僕には到底お会い出来ない方々でしょうね」
「そうだねえ。俺も会ったことないし。会えたら智くんなら訊けるよね」
　遠藤がお茶をすする。
「あ。今日はお茶菓子があるんだよ。智が家庭科の授業で作った羊羹」
「わー。僕、羊羹好きなんですよ。智くん有り難う」
「冷えたお茶しか飲めないのにお茶菓子好きだよな。……お雪、智に惚れるなよ」
　神坂が羊羹を切り分け、あまった薄っぺらい切れ端をどうしようか考え始めた。
「智、こっち向いて、口あけて」
「ん？」
　指を突っ込まれ、智は思わず神坂の指先ごと羊羹を食べた。口をもぐもぐ動かして飲み込むと、指が解放された神坂はちょっと顔を赤くしていた。
「なにこれ、新婚さんみたいだね」
「んー、やっぱり変に甘すぎましたね。砂糖の量はちゃんとやったはずだったんですけど。煮込みすぎたのかな。それとも塩が足りなかったのかな」
「これって舐めるべきかな。うん、舐めていいよね」
「……社長、それは流石に変態ですよ」
　血迷ったことをしそうになっている神坂を周りが止めようとする。智は何の気なしにお茶で口

の中をすっきりさせた。
「社長？」
「は、はい！」
「なんですか。気味が悪い。書類が出来たので小ヶ谷先輩を近いうちに呼んでください」
　何を指汚してるんですかと、智は台布巾を神坂に渡した。

「ねえ、智。はっきり言っていいよ。雪嶋は溶かすべきだよね」
「本当だよな。雪嶋、溶かしてもいいよな」
「……社長も遠藤さんも、雪嶋さんは悪くないですよ」
　むしろ悪いのは社長でしょうと、智はくらくらする頭を抱えながら言った。
　今、智は四十度近い熱を出して長椅子に横になっている。額には冷えピタが張られていた。
「御免ね、ごめんね。智くん、本当に御免ねっ！」
　雪嶋が泣きながら氷結した部屋を掃除していた。
　何故、智が熱を出したかと言うと、原因は雪嶋の氷結能力にあった。彼は羞恥心が極度に高まると空気中の水分を集めて氷結させる厄介な能力があり、神坂の趣味になりつつあるＢＬＣＤを聞いてしまったがためにそれを発動させて部屋を凍らせた。
　その能力を運悪く直撃の形で受けてしまった智は一瞬にして高熱を出し、終業時間が過ぎても熱が引かずに今夜は神坂の家に泊まることになってしまったのだ。
「雪嶋を溶かしたくなったらいつでも言ってね。アテネの聖火台にでも落としてくるから」
「物騒なことを言わないでください」
　バイト先で高熱を出しただなんて知れたら辞めろと言われかねないと危惧して、智は家に帰らない決意をした。果たして一晩で熱が冷めるのかは謎なものだが、「いかちゃんの恋人が医者だから、診てもらえるように訊いてくるよ」
　神坂が箒ならぬ、死に神の鎌に乗って出かけて行き、屋敷を連れて帰ってきた。
「お雪にやられたんだって？お前、ついてないなあ」
「徹くん、そういう無駄口いいから早く診てあげて」
「神坂さん、うちのリイカに借りがあるの忘れてるだろ」
「いかちゃんに借りはあるけど徹くんには貸しがいっぱいある」
　舌打ちをした屋敷は手袋をはめて智の診察に取りかかった。
「熱は高いが大したことない。これならしっかり食って、しっかり薬飲めば一晩で下がるはずだ。……今の手持ちだと当てはまる薬がないから俺を送るついでに診療所に寄ってけ」
　貧血でも起こしているのか、ややふらつきながら屋敷は鎌の柄に掴まってそのまま宙ぶらりんで消えて行った。
「待たせたね」
　帰ってきた神坂は「いかちゃん最近足りてないのかな。徹くん、嫌がってないでレバー食べればいいのに」
　くすくす笑いながら料理を始めた。
「おかゆでいいよね」
「……僕、作りましょうか」
「それはまた今度ね。智は病人なんだから、俺に任せて」
「済みません」

溜息をつく智の髪を神坂が掻き混ぜるように撫でる。やや乱暴な仕草なのに落ち着いて、智は目を閉じた。
「出来るまで時間あるから、少し眠る？」
「はい」
目を閉じると料理のいい香りの他に、神坂の部屋の匂いがした。花のような、控えめなのに鼻孔をくすぐるいい匂い。
そういえばキスされた時も同じような匂いがしたなと思い出した。小さく笑ったのがわかったのか、神坂が振り向いた。
「智……？」
「しゃちょう、キス……、はじめてだったんでしょ」
「いかちゃんが喋ったの？男の沽券を台無しにしたな、あの野郎」
ばつの悪そうな顔をした神坂に、「社長はよかったんですか？ファーストキスが僕で」
智はくすっと笑った。熱で染まったその頬を神坂が撫でる。
「俺、智が好きだから。ファーストキスはやっぱり好きな人がいいでしょ。……智は俺が好きじゃないから違ったけど」
御免ねと、悲しそうに言われると胸が締め付けられて智は首を振っていた。
「もし、好きになったら好きな人とファーストキスしたってことになるからいいじゃないですか」
「……俺のこと好きになってないのにどうしてそんなこと言うの？俺の株はどん底の値段なんでしょ」
明らかに失神していたのに聞いていたのかと驚いたが、智は自分でもどうしてそんなことを言ったのかわからなかった。
あの時は怒ったはずなのに、嫌だったはずなのに、思い出してもそんなことは思わない。
むしろ「キスって言っても軽かったし、ちゃんとしたのってどういうのかなって、ちょっと気になりました」
なんだか続きをしてほしくなって、智は強請りそうになる自分が信じられなかった。
「誘ってるの？……熱があるから心細くて人恋しいって、人間はよくあるよね。そういうもの？」
「さあ。こういう感覚、初めてです」
じっと神坂を見ると何故か視界がぼやけて、熱が高いのだなと思った。智が何か言う前に、その唇が塞がれる。
「・・・・・・」
優しい優しいキスは、熱で浮かされている頭を更に鈍らせ、心をゆっくりと溶かしていく。
息継ぎをしても繰り返し施される唇への愛撫に、智はくすぐったさと少しの快感を確かに感じていた。
神坂がゆっくりと智をベッドから自分の方に抱き寄せるように背を抱いた。唇を離して、一瞬見詰め合った紅茶色の瞳は智しか映しておらず、相変わらず綺麗に輝いている。

　智はいつの間にか自分が神坂にしがみついていることに気付いた。恥ずかしさから身体を離そうとしても、言うことを利いてくれない。
　初めて神坂と関わった時のように、なにか魔法のような強制力が自分を支配しているのかと思ったが、本当は自分が彼を離したくないだけだと智は悟った。
「さとる……」
　自分を呼ぶ、神坂の声が色に濡れている。ぞくりとする男の色気に智は身体が強張るのを感じた。
「御免。悪いけど、智から離れて」
「え？」
「俺、自分から智に離れられる自信がない。……それどころか、智に酷いことしそうで怖い。智が熱でわけがわからなくなってるのにつけこんでめちゃくちゃにしそう。だから俺を突っぱねて。いつもみたいに殴ってもいい。痛いこと、嫌だろ？」
　震える声で言われ、それに反してぎゅっと抱き締められる。
　智は胸が熱くなった。そして恐る恐る抱き返すと、神坂はびくりとした。
「勉強してるのに、自信がないんですか？」
「・・・・・・」
「僕以外の誰かで勉強しないでくださいよ？」
「……だから誘うようなこと、言うなよ……」
　困った声をあげる神坂が妙に可愛くて、自分のことを本当に好きなんだなあと智は笑みが漏れた。
　さっきのお返しとばかりに頬に自分からキスをすると神坂の瞳が明らかに揺れる。そして、唇同士がまた重なった。
「今は熱があるから、冷めたらきっと何をしても忘れてるよね」
「忘れません」
「してもいいの？」
「……痛くしないなら」
　何かを食べて、薬を飲まなければと思うのに、智は徐々に自分へ体重をかけてくる神坂に注意が行ってしまい、それを忘れていった。ぎしっと、ベッドが二人分の体重を受け止める。
　神坂の長い髪が垂れて首筋をくすぐった。
「どういう心境の変化なんだ？熱のせいでおかしくなった？」
「なんでだろう。社長が、僕をそばに置きたいと思ってくれてるから、かな」
　小ヶ谷が、自分たちはたくさんの出会いと別れを繰り返してきたと言った。
　その中で、神坂は自分が魔物だから、魔物としての仕事をしなければいけないから、別れなければいけない人たちもいたはずだ。
　その中にはきっと、別れ難いくらい愛おしい人もいただろう。
　心に傷が出来ないわけではない。魔物だって、感情があるのだから消えない傷くらいある。もう、大切な人を持ちたくないと思ったことだって、人間とは違う長い年月の中ではあっただ

ろう。
　それでも、「僕を好きだと言ってくれる社長を、僕は信じてみたくなりました」
　傷ついても自分に心を寄せてくれた人を、智は愛おしく思った。それは熱があるような、浮かされているようなこんなタイミングでしか言えない、照れ臭い告白になってしまったけれど。
「名刺を拾ったのが智でよかった」
　神坂は泣きそうな笑顔になって、智を優しく抱いた。
「ずっと一緒にいて」
　そう囁いた神坂の願いを、智は叶えたいと思った。

「え、僕に特別給与、ですか……？」
「うん。今回の功労賞はいかちゃんとお雪だから。いかちゃんは徹くんの分と相殺で、お雪だけね」
　神坂が輝かんばかりの笑顔で差し出す封筒を、昨日まで殺害予告が出されていた雪嶋はビクつきながらも受け取った。
　雪嶋が怯えているのを見て、智は腰をかばいながら小さく笑っていた。

番外編〇一：強盗ＶＳブチ切れ死に神

　金融会社スチャラカぱらだいすにくるまで、九件バイト先を変わったが、一度もこんなことなかったなと、智は世の中の平和さと、今自分の身に起きている物騒さを嘆いた。
「今はお前しかいないのか……」
「そうなんです。社長も社員もいないんです」
「未だ子供じゃねえか。ちくしょう、どうすっか」
　二人組の強盗は、口々に愚痴を垂れて会社内を見回っている。金目のものがないか見ているのだろうが、この会社にはパソコン機器くらいしかそういったものはない。
「おい、金庫は何処だ？お前知ってるだろう？」
「生憎、僕はバイトなので教えてもらっていません」
　それは本当なので、智は正直に答えたが、更に本当のことを言うとこの会社の金は給湯室の神棚にある招き猫からいくらでも引き出せると、社長である神坂が公言していることは黙っていた。
　魔物の癖に神棚はどうかと、智はその時小さな疑問を持ったものだ。
「金庫なかったぜ。おかしいな。俺が借りた時は確かに奥から金を持ってきたのに」
「債務者の方ですか」
　下調べは一応していたらしいが、未だ甘い。
　この場合は警察を速やかに呼ぶべきだと、取り敢えず自動ドアのロックボタンを押した。
「今何をしたっ？」
　素早く異変に気付かれて、智は突き飛ばされて長椅子に転がった。すかさず頭にピストルを突きつけられる。
　多分、偽物だなと思ったが口にはしなかった。この平和な日本でこんな下っ端の会社に強盗に入る二人組がピストルなんて持っているはずはない。
「入り口を開けろ！」
「閉め方は知っていても開け方は知りません」
「くっそっ」
　耳元でリボルバーが少し動く。至近距離なので偽物でも撃たれたら流石に痛いだけでは済まない。
　ふと目を向けると、自動ドアの向こうに遠藤と近江を見つけた。遠藤はガラスのドア越しに中を一瞥して状況を察したようで、磨りガラス部分でぼやけている近江をかばうようにして姿を消した。
　裏口に回って進入して事態を収拾してくれるか、警察を呼んでくれるかしてくれるだろう。
　智は安心して溜息をついたが、それをどう思ったのか強盗が彼の胸倉を掴んだ。
「俺たちを間抜けだと思ってるだろ！ガキのくせに！馬鹿にしやがってっ！」
「とんだ誤解だ」
「黙れ！この金貸しの手下のくせにっ！」

始終、智が余裕なのが気に食わなかったのだろう。
強盗たちは堰を切ったように怒鳴り始めた。五月蠅いなあと智は嫌になった。
自棄になった強盗の片割れが、何処かを押したのか、自動ドアが開いてしまった。
「・・・・・・」
そこに立っていたのはにっこり笑った神坂だった。
「な、なんだお前……」
「社員から連絡を受けまして、大事なお客様だと言うので社長の俺が直々にお相手をしようかと」
どうやら遠藤たちは警察ではなく神坂を呼んだらしい。こんなので戦力になるのかと智は失礼にも思ったが、神坂は一応死に神という魔物なのでなんとかするだろうと思い直した。
その、神坂の視線がある一点で釘付けになった。
「……智、犯されたの……？」
緊迫した静寂の中、その呟きは自棄に寒々と響く。神坂以外は何を言っているのだとはてなマークが飛ぶ。
「ふ、服がはだけてるよ……っ」
「ああ……」
強盗に引っ張られて服が伸びているだけだと思うが、神坂の恋する盲目視点から見ると、不埒な強盗が手を出そうとはだけさせたように見えるのだろう。
そこで智は演技をすることにした。
少し目を潤ませて嫌そうに身体を捩ってみる。
「しゃちょう……、助けてください……」
神坂の整った顔が、まるで自らが苦痛を与えられたかのごとく歪んだ。可哀想にと今にも泣き出しそうだ。
「辛い思いをしたんだね。ああ、俺が席を外している間に恋人が強姦されるなんて。……こんな悲劇的なこと、楽園と謳われる魔王陛下の治世にあっていいのだろうか」
「……おい、俺たち何もしてないぞ……」
「犯罪者というのは大抵、罪を罪とは認めないものだ。俺の可愛い智の肌を味わっておいていい度胸だ。人間にしては骨があるが、度胸を使う相手を間違えたな」
「だから、何もしてねえって……」
強盗が突っ込みを入れても神坂は嘆き悲しみ続け、はたと止まったかと思うと笑い出した。
壊れたかと周りは不気味に思った。
「はい。ここで智を穢した野獣どもにお仕置きの時間です。右手を見てください」
神坂が何も持っていない右手をひらひらさせると、「な、なんだそれっ」
一瞬にして大鎌が現れた。それを、智は死に神の仕事道具だと聞いている。
「これは人間の命名によればデスサイズという、死に神が魔力を使う時に使う道具です。例外はありますが、俺は元々は間接系魔力使役型という、何かしらの道具がないと魔力を使うことが出来ない魔物でもあります」

「・・・・・・」
　何を説明し出したかと思うと、神坂はにこやかにデスサイズを一振りした。この世のどのような金属で作っても相当な重さになるだろう、デスサイズが一瞬見えないくらい速い動作だった。
　その途端、智を押さえていた強盗が崩れ落ちた。
「な、なにしたっ！お、おおい、大丈夫かっ！」
「今、俺が何をしたかと言いますと。魂と肉体を切り離したんですね」
「……は？」
「魂と肉体は密接に関係しています。死んだ時離れる以外では滅多なことでは離れません。それを強制的に行うと、どうなるかわかりますか？」
　答えは必要としていないのか、神坂はにこりと笑って智の方に歩み寄り、彼の額にキスをした。
「強制的に引き剥がすことにより、この世のものとは思えない、魔物ですら耐え難い苦痛に苛まれ、魂がすり減りやがて消滅します。その途方もない時間、苦痛でもがき苦しむことになるのです。肉体に、戻ることもなく、誰にも気付かれずにね……」
　それは人としては死を意味するのではないかと智は思った。
　強盗も、何かはわからないが底知れない恐怖を感じたのだろう、「う、うわあああぁぁああっぁぁぁぁ！」
　神坂と智に向かってピストルを向けて連射した。当然だが二人には当たらない。
　握り拳を作った神坂は、その手からぱらぱらとプラスチックの破片を落とした。
「……うちも舐められたものだ。二人で寄って集って智を強姦した相手が、エアガンしか持っていないとは」
「あんたの中では強盗はどうでもいいのか」
「強盗なんてどうでもいいよ！智の健やかな肉体が穢されたってことが世界最大の悲劇だよっ！」
　初めて会った時、この男がまさかここまで自分に弱くなるとは思わなかったと、智は神坂が残念に思えてくる。
「ねえ、智。痛かったよね、辛かったよね？御免、……詳しく訊くことじゃないね。でも俺は恋人として、愛おしい智の身に起こったことを把握しておきたかったんだ。嗚呼、智の身体の中に俺以外のあれが入ったのか……」
　そして××を流し込まれたのかと、下品なことまで言うので智は思わず引っぱたいた。
「どうでもいいので、もう一人の強盗をどうにかしてください」
「……自分の身に起きた悲劇より、この世の悪を憎むとは智は本当に偉い子だ」
　視線をずらした神坂は、弾を片手で受け止められて呆然としている強盗と向き合った。笑顔が怖い。
「た、たすけ……」
「る、と思うか？恥を知れ」
　紅茶色の瞳が一瞬、紫に光り、神坂のデスサイズが強盗の首を嬲った。

　智は泣き崩れて自分にしがみつく男を心底煩わしく思った。
「さとる～っ！なんで？なんで嘘ついたのっ？俺、智が犯されたと思って死にたくなるくらい悲しかったんだからっ！」
「僕は別に犯されたとか、何も言ってません。助けてというのは強盗に入られたのだから当たり前に言う台詞じゃないですか」
「だからってさあ～っ」
「……ああ、この死体どうする？食っちゃう？」
　五月蠅く喚く社長を尻目に、他の社員たちは溜息をついた。

番外編〇二：「魔王陛下夫妻と記念日」前篇

　神坂の部屋で刺激的な一夜を過ごした智は、ぼんやりと朝食を食べていた。
　鰹節の出汁をとった味噌汁に、火で炙ったぱりぱりの海苔。魚のひものに、煮物、酢の物、よく漬かった漬け物と純和食なのは「日本にいるからにはそこのものを楽しまないとね」
　何処からどう見ても料理などに興味がなさそうな神坂が、意外なことを言って拵えているからだった。
「智、身体は辛くない？……昨日は少し頑張りすぎちゃったね」
「……いったいどうしてあんなに激しかったんですか。流石に何回も、最後は正直辛かったですよ」
　恨めしそうな視線を送る智に、神坂はまるで乙女のように「昨日が何の日か知らなかったのっ？智がそんなに薄情だったとは思わなかったっ！」
　拳を握って責めるので智は何のことかと小首をかしげた。
「え、本当にわからないんだ……」
　顔面蒼白になって項垂れる神坂に、申し訳なくなりながら頷くと「付き合って一年の記念日だよ。智と初めてセックスした日だよ！昨日だったのっ！」
「なんだ、そんな日ですか」
　さして重要ではないと智は味噌汁をすすった。
「そんなってなんだよ！」
「別に、大したことないでしょう。昨日は先約があったんですから、そっちを優先すればよかったのに」
「向こうが五十年前から先約を入れていようと、俺には智との記念日の方が大事だよ」
「乙女か、あんたは」
　呆れながらご飯に海苔を巻いて食べる。智は租借しながらふと奥の部屋に視線を移すと、珍しくドアが開いていて大きな姿見が見えた。
「……前から思っていたんですけど、男の部屋にしては随分意匠が凝ってる姿見ですよね、あれ……」
　初めて見た時は引いてしまったくらい、その姿見は豪華だった。大貴族のご令嬢が使うような、しかし神坂も貴族で容姿も洗練されているのでそう違和感がないところが怖い。
　智に言われて姿見を見た神坂は「ああ、あれ。あれはワープゲートみたいなもんだよ。魔物の世界とこの世界とを行き来するために使うの」
　漬け物をぱりぱり食べながら言う。
「まるで猫型ロボットの便利道具ですね」
「智は本当に適応能力高いよね」
　そうでなければこの男とは付き合っていけないと智は黙ってお茶の用意をした。
　食事も一段落した頃、何故か寒気がしたので身震いすると「あ、なんか来る。この魔力の感じからすると……」

　神坂が呟いた瞬間、奥の部屋で爆音がした。
「ちょっと、壊さないでくださいよ！それ高いんだから！」
　奥の部屋に怒鳴った神坂に対し、「うるせえよ！だったらこんな狭い部屋に飾ってるんじゃねえっ。だいたい仕掛けが古いんだよ、このゲート！なんで毎回服が汚れるんだよ！」
　怒鳴り返してきた美声に智は軽い目眩を感じた。ふらつく智を抱き留めた神坂は素早く彼にキスをした。
「なにするんですか……」
「ちょっとした印だよ」
「おい、築！聞いてるのか、てめえ」
「五月蠅いですよ、女王陛下」
「女王陛下……？」
　ドアを蹴り破る勢いで入ってきたのは男で、それも見たことがないくらい美形だった。普段、スチャラカのメンバーで美形慣れしている智でも思わず目を見張った。
　だが、それだけだと思うと急に肩の力が抜ける。
「女王陛下様、ですか。初めまして」
「……反応薄い。なに、この子人間？どーして俺の魅力に腰を抜かさないの？」
「確かに魅力的な容姿をしていらっしゃるとは思いますが、僕にはもう恋人がいるので。第一、男にいちいち興味を惹かれるほど、僕は同性を愛するようには出来てませんので」
　智が伸びをしながらお茶の用意を再開していると、女王陛下は「なんだそれ！超面白い！築、お前の恋人すげえな！」
　爆笑して壁をばんばん叩いた。
「壊さないでくださいよ。智が凄いのは今に始まったことではないです。……智、お茶を一杯追加」
　神坂が嫌そうに上座を譲ると、女王陛下は遠慮もなく座った。
「今日は何の用事ですか。俺に会いに来るなんて珍しいですね」
「お前ね、そういうこと言う？結婚記念日のパーティーサボってるから何事かと思って様子見にきた大叔父に向かって、そういう不義理なこと言う？つうか、俺の旦那さんの煌びやかな姿、見ないとかなんて不義理なの？馬鹿？もう昨日も凄かったんだから」
「別に、五十年ごとにやってる馬鹿騒ぎを今更何度休んでも差し障りないでしょ」
　結婚記念日を五十年ごとしか祝わないとは、魔物は変わっている。人間なら一回やった時点でその次は墓場でやることになる。
　智は「昨日はそのパーティーだったんですね。済みません。なんかこちらの記念日を社長が優先させちゃったみたいなんですよ」
　お茶を出しながら謝った。
　先ほどから一つの世界の女王相手に、何の構えもなく自然体の智に、女王陛下は何を思ったのか「貴族の魔物だって俺のこと恐れてるって言うのに、お前は凄まじい精神力の持ち主だな」
　感心して智の頭を撫でた。

「恐れ入ります」
「名前は？」
「鷺沼智です」
「智ね。俺はイデア。呼び捨てでいいよ」
　気さくな女王陛下はお茶を飲んで目を見開いた。
「……うまいな。うん、これはいい」
「お気に召してよかったです」
　智もお茶を飲んで、今日は上手く煎れられたと自画自賛。
「築。お前の恋人、借りていい？きっとね、旦那さんにいいと思うんだよ。昨日のプレゼントより気に入られたら困るけど」
「は？嫌ですよ。あんた、何言ってるの」
「昨日の出席率、初めて百パーセント切ったんだけど。誰のせいだと思ってるんだ、てめえ。旦那さんはめちゃくちゃ優しいから全然怒らなかったけど、俺は欠席理由が恋人といちゃつくからっていう自己中な理由で、すげえ腹立った」
「……僕でお役に立てるなら何処へでも行きますが」
　神坂が異議を叫ぶが、智は「あんたがすっぽかすのが悪い」
　冷ややかな目で恋人を見た。
「そうこなくちゃ。ちょっくら借りて行くわ」
「待ってください。俺も行きます。……智一人で行かせるなんて冗談じゃない」
　不機嫌そうな神坂が手をひらひらさせると黒い大きな布が現れた。フードつきのマントのようで、智はそれを頭から被せられた。
「手厚く守っちゃって。お前の加護はムラっ気があるんだよな」
　くすくす笑ったイデアが指を鳴らすと智の頭上に紫色の環が一瞬光った。
「……一応は感謝しますよ」
「素直に感謝しろよ」
　ブスッとした神坂は姿見に手を当てた。発光した鏡は部屋ではなく別のところを映している。
「はい、どんと行っちゃって」
「お邪魔します」
　未知の体験に好奇心が揺さぶられた智は少しワクワクしてきた。足を踏み入れると、
「・・・・・・」
　目にも鮮やかで煌びやかな装飾の部屋が目の前に広がった。
「凄い……」
　まるで、美術の資料集で見た西洋貴族の屋敷のようだった。
「あれ？さっきまでここにいたんだけどな」
　イデアは長い金髪を掻き上げて辺りを見回し、「あー、屋敷内だったら好きなところ歩いてていいよ。探してくるわ。築、行くぞ」
「なんで俺まで。アルバートはどうしたんだよ」

「どっかの令嬢の仕込み中」
「ロリコン執事が」
　舌打ちをした神坂は「ここから動かないでね」
　心配そうに言ってイデアについて行った。
「きて早々、暇になってしまった」
　興味深い調度品ばかりだったが、触れて何かあったら弁償できるものではなさそうなので智は外の景色を見ることにした。窓際に歩いて行く途中、「うわあっ！」
　突然床が消えて辺りが真っ暗になり、吸い込まれるように落下して行く。
「いたっ」
　昨晩から朝方まで酷使された腰と尻には手痛いダメージを受けて尻餅をついた智はさすりながら立ち上がった。
「忍者屋敷か？江戸村じゃないんだから……」
「……おや、また毛色が違うものが紛れ込んできたな……」
「ひっ」
　思わず声をあげたのは、相手の声が凄まじく美しかったからだ。
　ゆっくり振り返ると、地上より下にあるはずなのに聳え立っている大木から声が聞こえていた。

番外編〇三：「魔王陛下夫妻と記念日」後篇

「木の、魔物？」
「……物怖じしないとは、なかなか見所がありそうだ」
　くすりと笑ったような声は、だんだんと焦点が絞られてきているように「私は魔物ではないがな」
　人型に集結して形をなした。
「・・・・・・」
　彼は、一言で言うと麗しいという単語が当てはまった。
　しかしどの美辞麗句を挙げても、どんなに書き連ねても彼の容姿について表現することは出来ないだろう、そんな美しさがあった。百戦錬磨の平常心を持つ智も、彼には言葉を忘れてしまった。
「固くなるな」
「……は、はい……」
　あやすように表情を和らげた彼は、「人の子だな。我が妻と、築に認められているとは珍しい」
　優しい声色で呟いた。そして指を揺らすとそこに椅子が現れ、智に座るようにと目で示した。
「有り難うございます。……魔王、陛下……」
「結構。築が私たちの結婚記念日を放っておくくらい、恋し愛している人間とはどういう人間か興味があったが、……可愛いが、子供だな……」
「そうですよね。……未だ二十年も生きてないので」
「私は生まれた時からこの姿だから、成長というものはわからないが、人は百年くらいで滅ぶらしいな」
　それもなかなか、いいかもしれないと魔王陛下は酔狂に微笑む。
「智、でいいか。……魔王とは、どういうものか知っているか？」
　突然の問いかけに、「魔物の世界の王様、ですよね」
　智はゆっくり考えて当然の答えをした。
「簡単だが、その一言に尽きる。魔王はこの世界の柱だ。全ての魔物を平等に愛さなければならない。そこに優劣をつけてしまっては争いの元になる。私の愛は、本来なら魔物全てものもだ」
　魔王陛下が智に背を向けると、陛下の眼前に地平線まで建物が見えた。それは魔物たちが暮らす建物なのだろう。
「魔王が心を砕く場合、全てに傾かなければいけない。だから、特定に恋をして、愛することは禁じられていた」
　智は、それは耐え難い苦痛なのではないかと思った。
　目の前の美しい男はさして感情など感じないくらい淡々とした雰囲気を持っているが、種族が違おうと心は必ず存在する。心を持つからには、誰かを愛したいと思うことは普通の感情だからだ。

「……そんな顔をするな。だから、魔王には伴侶がいるのだ」
「でも、恋をしてはいけないんですよね」
「そうだ。本来、伴侶とは公務に身を削る魔王を支えるだけの存在だ。恋しいだとか、愛しているだとか、個別的な感情を持って伴侶に接する魔王は存在していない」
「それは、悲しいことではないんですか。好きな人を伴侶にって思わないんですか」
　思わず言うと、魔王陛下は感情のない声で「我が妻とも、好き合って一緒になったわけではない」
　それが当然のことのように言う。
　確かに、無限のように広い世界を一人で支える孤高の魔王陛下には伴侶が必要だ。しかし、好きな人ですらないとは、そんなことは虚しいのではないか。
　智の心を読んだのか、魔王陛下は目を細めた。
「初めは好きではなかった。しかし、婚姻を結んでから、恋をすることもある」
　魔王陛下の言葉に、偽りはなさそうだった。
「妻は、イデアは私が恋をしたいと言ったら恋をさせてくれると言った。それを叶えるために我が妻となった。私は正直なところ半信半疑だったが、……本当に恋が出来た……」
　智の方を向き直った魔王陛下は自分も椅子を出して座った。
「私は歴代のどの魔王よりも長く生きる。長く生きていくものには褒美が必要だろう？だから禁忌を破ることを厭わず、恋を望んだ。そしてそれを叶えてくれる伴侶に巡り会えた。恋の素晴らしさをこの世界の誰よりも知っているつもりだ」
「素敵ですね」
　智が言うと、魔王陛下は少しだけ声を落とした。
「だが、私が寵愛することであれの苦労は絶えない。私と執事以外の魔物全員から命を狙われているようなものだ。私が滅ぶ、気の遠くなるような年月が過ぎなければ解放されない、果てしない闇の中だ。心は疲弊し、身は休まらない」
　イデアの表情に、そんな陰はまったくなかった。それは、きっと「苦労をしても、いいと思っていると思います。それくらい、魔王陛下のことを愛してらっしゃるんですよ」
　今日会ったばかりのイデアをまったく知らない智には予想でしかものが言えないが、これだけはわかる気がした。
「だって、魔王陛下のことを考えていると思った時のイデア陛下はとても優しい顔をしていました」
　命を狙われても、それで自分がどうなろうと、イデアはきっと魔王陛下を愛していて、愛し続けるのだろう。彼が魔王陛下のことを想った時の顔は、そんな愛おしさが籠もっていて、観察力がなくてもわかるくらいだった。
「……私が守ろうとすると、火に油を注いだようになる。しかし、私は妻を愛している。今更離縁するわけにもいかないし、自分の心を殺すことも出来ないのだ。その分、私が出来うる全てで妻を愛しているつもりだ。この身が滅ぶその時まで、全ての愛情を砕こうと思っている。……心だけでは足りないと言って、しつこく身体も求めてくるがな。肉体の方は、私は熱心ではない」

「それでも情熱的な恋愛をしていらっしゃるんですね」
「わがままなやつが魔王だと思っているだろう」
「いいえ。僕の感覚からすると恋する素敵な魔王陛下ですよ」
　にっこり笑う智に、魔王陛下は驚いた顔をした。
「築が惚れるだけのことはあるな」
　神坂の審美眼は魔王陛下すら一目置いているらしい。
　一息ついて「恋愛は至上だ。だから欠席も私は気にしていないのだが、どうせ、イデアが文句を言って、無理強いをしたのだろう。……あれもわがままでな。甘やかしすぎたのだ。許せよ」
「とんでもないです。僕の方こそ、愛し合っているお二人のとても大事な記念日だったなんて知らなくて、失礼なことをしてしまいました。社長にはきつく言っておきます」
「恋人のわがままに付き合うのも度量というものだ。あまり責めてやるなよ」
　智は改めて頭を下げた。
　魔王陛下はいい人だなあと、智は不遜ながらも身近な人のように感じてしまった。そんな彼に、魔王陛下も親しみを覚えたのか、「イデアは何をさせようとしたのだろうな。築に恋をするお前が、私の相手をするとは思えん」
　少し意地悪そうに言った。
「女王陛下は、お茶を飲んで閃いていらっしゃいましたが」
「お茶……」
　魔王陛下の真黒な目が輝いた気がした。

「ちょ、ちょっと社長っ……やっ」
　意外にもお茶を飲むのがが趣味だという魔王陛下に、お茶を提供して戻ってきた智は、何故か神坂に押し倒されていた。
　服越しに昨日さんざんいじられた弱いところを再びいじられて、身体に痺れるような快感が走る。
「何してるんですか！僕、今日は帰らないといけないんですよ！明日学校なんですっ！」
「……やだ。明日は休んで」
「馬鹿！」
　渾身の力を使って神坂を引き剥がした智は、彼の頭に軽く拳を落とした。
「もう、何なんですか。どうして機嫌が悪いんですか？」
「魔王陛下に気に入られちゃったから」
「はあ？あんた、子供ですか」
「魔王陛下って無関心無感動で有名なんだよ？基本的に女王陛下にしか興味がないし、自分から話しかけたりもしないし、笑いかけるとかないんだから！その陛下が、智にはベタ甘じゃん！恋人の座が危ういよ！」
「……あのなあ……」
　何を幼児返りしているんだこの馬鹿はと、智は呆れた。

「安心してくださいよ。魔王陛下は僕が人間で、あんたが約束すっぽかした原因だから珍しかっただけです。多少、お話はしましたけど、素敵な人だとは思いましたけど、あんたを振るわけないでしょうが」
「……魔王陛下がライバルなんて、困る……」
「くどいぞ」
　睨み付けられた神坂は、犬の耳があるならしゅんっと垂れてしまったような表情でベッドに寝そべった。
「僕、魔王陛下みたいな人になりたいな」
「あんな淡泊になったら困るよ。夜が素っ気なさそう」
「……あんた、何処見てたの」
　ふとした時に見えた、イデアの首筋についた無数のキスマーク。あれは誰あろう、魔王陛下がつけたに違いなかった。
「あ、でも社長はもうちょっと抑えてくださいね。困ります」
　同じように見えた魔王陛下の首筋にも色の濃いキスマークが恥ずかしくなるくらいついていたのを思い出して、智は頬を染めた。
　ああいう恋人同士になるのもいいかも、なんて言うと神坂がつけあがるので黙っていることにしよう。

番外編〇四：仄かに光り指す帰り道

　そこは静寂の闇、砂利を踏む音だけが響く。
　一人の男は息を飲み、もう一人は彼を追い詰める。
「なあ、冗談だろ……？おとぎ話じゃねえんだから、そんなので狩るなよ。だいたい、俺みたいな下っ端にあんたみたいなのがくるなんて、……なんなんだよっ」
「おとぎ話のこういう類は、もうちょっとメルヘンチックだろ？」
　こんなに実践的な形はしていないと、長い柄のついた鎌を携えている紅茶色の瞳の男は薄く笑った。
　追い詰められている男は逃げ道がないと知っていたが、それでも後ずさらなければいけないと本能で身体を動かしている。
　狩るものと、狩られるもの。
　本来の弱肉強食、生命のやりとり。
　それが、死に神と呼ばれる男の、仕事だった。
「待ってくれ。俺には妻も、娘もいるんだ。息子だって、生まれるんだ。今死ぬわけにはいかない！」
「仕方がないだろう？あんたが積んだ金は尽きた。積み立てる金がないなら失ったはずの命は返してもらおう。借りたものは返す、それが通説だ」
「せ、せめて最後に家族の姿を見させてくれっ」
「これでも待ったんだ。お前に猶予はない」
　普段の彼を知っているなら、いや彼の恋人なら、彼の今の表情を信じられない思いで見詰めているだろう。
　彼、人間としての日本人名、神坂築は酷く冷めた表情で、尻餅をついた標的を見下ろしていた。
　そして、死に神の鎌が獲物の首を嬲った。
「・・・・・・」
　命の灯火は薄い光となって肉体を離れ、神坂の仲間が待つ黄泉に送られる。そこで審判を受け、輪廻に戻され、サイクルを終えると何かに宿る。
　もう気の遠くなるほどに繰り返された、死に神の仕事。それしか知らないから、死に神は不満を漏らさない。
　しかし、神坂は「俺だって、こんなことしたくない……」
　死に神らしからぬ、死に神としての自分に疑問を持つ死に神だった。
　消えていった命を見るのはいつだっていい気分ではない。仲間の中には狩ることこそを至上の喜びとし、快楽とまで言うものもいる。その神経は、神坂にはわからない。
　ふと空を見上げると、魔物の世界でも滅多に見られない、綺麗な星空があった。
　人間の世界にこられるようになってから何百年、ずっとここにいられたらといつも願う。そして仕事がなければと、毎回思う。

　どんなものであろうと、命なんて奪いたくない。神坂は自分が偽善と言われようと、手遅れだと誹られようと、死に神でなければと思わずにはいられないでいる。
　それが強くなったのは、自分の命よりも大切な彼に、出会ってしまったから。その大切な彼の命を、いずれ自分が黄泉に送るという、残酷な運命を知っているから。
　他の誰かに彼の最期を任せるなら、いっそ自分でよかったと思うのもいいのかもしれない。しかし、そう思うには人間の一生は神坂にとっては短すぎる。
　たった百年ぽっち。
　神坂の時間としては一歩歩いただけで終わってしまうような、儚い時間の経過だ。
　百年で、どれくらい彼との思い出を作れるだろう。そもそも百年も彼は生きないのではないか。こうしている間にも、彼の生きる時間は点された蝋燭のように短くなっていく。
「会いに行っちゃおうかな……」
　顔が見たくなったけれど、もう丑三つ時を過ぎた頃だ。学校があると言っていた彼はきっと眠っている。
　それでも神坂は柄に座って空を飛んだ。
　彼の住む一軒家には、やはり明かりはない。
　カーテンが引かれているので彼の部屋の様子を伺うことは出来ず、神坂はわかりきっていたことだと息をついた。
　帰ろうとして上昇しかけた時、「社長……？」
　聞きたかった声が耳に響いて神坂は辺りを見回した。
「何やってるんですか？仕事、ですか……？」
　コンビニの袋を持った恋人が、相変わらずの落ち着きぶりで神坂を見上げていた。
「うん、仕事。智は、夜食の調達？」
「そうなんです。今、家に誰もいないんですよ」
　あがっていきますか、と言われて誘惑に逆らえず、神坂は柄から降りた。
「恋人の家っていいね」
「思春期の乙女ですか」
　苦笑した恋人は、床に座った神坂を見て珍しく表情を動かした。何か、酷く切なげに見詰められて神坂は小首をかしげる。
「社長、……仕事、きつくないですか」
「え……？」
　頬に触れられた神坂は、自分が作り笑いをしているのに気付かされて黙り込んだ。普段はもっと心から笑みを浮かべて、飄々としているのに、恋人は鋭いから何かを察知したらしい。
　いつもは口を挟まないのに「仕事、辞められないんですよね」
　そんなことを言ってきた。
「仕事辞めたら死んじゃうんだよ。魔物って簡単に死ぬよね」
　神坂は恋人を抱き締めて香りを吸い込んだ。自分と同じ夜気の香りと混ざって、恋人は暖かくていい香りがする。

「仕事の時の独特な、匂いがしますよ」
「御免っ」
　恋人は自分と関係を持ってから生命の匂いに敏感になった。今日も神坂が奪った命が流した見えない血の匂いを感じ取ったのだろう。
　慌てて離れようとした神坂の身体を、恋人は思いがけない力で抱き寄せた。
　華奢な身体に反した強い力で、慰めるように抱き締められると涙が出そうになった。
「……離して。匂いが移るよ……」
「そんな声で言われても離せませんよ」
「俺、どんな声なの」
「可愛い声です」
「なにそれ」
　くすっと笑ったはずなのに、目尻から涙が本当に出てしまった。拭おうとしても抱き締められていて出来ない。
「大人の癖に恥ずかしいな」
　冗談めかして言うのに、恋人は「大人でも辛い時は泣いたっていいんじゃないですか」
　とことん甘やかすように囁く。
「智って、本当に人間の高校生なの？俺よりずっと強いし、年上みたいだよ？」
「いつもの社長は僕なんか足元にも及ばないけど、今日は僕が寄りかからせてあげたいから」
　恋人は、神坂がいつか自分の命を奪いに来ることを知っているのだろうか。そんなことも思えてしまうくらい、神坂の中を見透かしているようだった。
　口にしたら、彼は自分を哀れむだろうか。それとも、遠い昔に恋をした女の子のように、今度こそ自分を恐れるだろうか。
　どちらにしても、それは嫌だなと、神坂は目を閉じた。
「ねえ、智。キスしていい？」
「社長の部屋に連れて行ってくれたらいいですよ」
「それって泊まっていってくれるってこと？学校は？」
「一通り用意して行って社長の家から行けばいいですから、別にかまわないんです」
　慈しむような優しい笑みを向けられ、神坂はこの子には永遠に敵わないなあと思った。
「お願いしちゃおうかな」
　ぶりっこをして言うと、恋人はそっと神坂の頬にキスをした。
「可愛いからキスしたくなりました」
「普段の俺の気持ちがわかったでしょ？これからは無闇に恋人を殴らないこと」
「社長は場所と時を選ばないから殴られるんですよ」
　苦笑されて、神坂も笑みを返した。
　今度は本当に笑えていたようで、恋人の表情は曇らなかった。
「ねえ、社長。……ずっと一緒にいてくれって言ったでしょ？」
「うん」

「それ、僕も同じこと言いますよ。ずっと一緒にいてほしいです。だから、僕が死ぬ時は、社長は仕事を辞めればいいんですよ」
　仕事を辞めたら魔物は死ぬ。聡い恋人は自分を最期の仕事にさせて、神坂に辛い思いを長引かせないままで死なせようと思っているらしい。
「仲間の死に神が聞いたら、智は怒られちゃうよ？」
「小ヶ谷先輩が言ってましたけど、社長は死に神だと結構偉いほうなんでしょ。死ぬ前に一回くらいわがまま言ったっていいじゃないですか」
「それもそうだね」
　部屋について、ちゃんとキスをして、抱いて抱き返された恋人は、薄く入ってきた光に照らされてキラキラしていた。
「智って俺を導く光みたいだね」
「運命に導かれて出会ったから、そういう役割もあるのかも」
　胸の内に抱き込まれた恋人は、そう言って小さく笑った。

番外編〇五：日常の謎

「リイカ。朝だぞ。あーさーっ！」
「……喚くな。聞こえている」
　小ヶ谷リイカ（名字だけ仮名）は不機嫌そうにベージュ色の髪の毛を掻き上げた。
「聞こえてるならさっさと起きろ。今日は午後から診察があるんだから、俺は忙しい」
「お前の事情で私の休日を急かすな」
「何様だ、お前」
　屋敷徹はいつものことと苦笑して、ベッドにいるリイカを抱き上げた。リイカは細身だが、男の体格なので軽々と出来るわけもないのだが、屋敷は医者という重労働をするにあたり鍛えている肉体があるので簡単に扱うことが出来た。
　今日は風が涼しいので庭のベンチに行き、口の中にタブレットと水を含んだ屋敷はそのままリイカに口移しで与える。
「……うっ」
　タブレットは濃縮血液で、吸血鬼のリイカはそれを口にしないと生きていけないのだが彼は嫌血鬼（ケンケツキ）という血液を受け入れられない身体でもあり、血液に拒絶反応を起こし、吐き気を催す。
「我慢だ。ゆっくり飲み干せ」
　屋敷はリイカを優しく見守って背を撫でてやる。
　毎度のことながら、この恋人は不運な身体に生まれてしまっていると嘆かずにはいられない。
　リイカは現在のところ、屋敷の血液から出来ているタブレットと、屋敷の生の血液で生きているが、出会うまでは適任の血液提供者を拒絶していたために瀕死の状態だった。
　出来るだけ若い提供者を見つけられるようにと、リイカを学生に化けさせて学校に送り込ませた彼の親友の神坂築は、「いかちゃんのことが好きなら手首切って口に突っ込んでくださいよ」
　リイカに仄かな恋心を抱いていた、当時医学生だった屋敷にそんなことを言った。
　屋敷は医者になるつもりだったし、万が一手首の神経を傷つけて医者になれなくなったらと思ったが、目を開けることすら出来ず、呼吸も荒い状態でベッドに横になっているリイカを見た時は考える余裕もなく手首を切った。
「お前は馬鹿なのか」
　吐き出しながらも少しずつ屋敷の血液を受け入れたリイカは、目覚めた時に開口一番そう言って、そして泣いた。
　リイカは、以前愛していた人間の女性を血液の飢えから吸血して殺してしまったという過去を持ち、なおさら血液を摂取することを嫌っていた。
　屋敷を二の舞にさせたくはないと、リイカはしばらく彼を拒んだが、無理矢理関係を結んで提供者の契約をさせ、今に至る。
　出会ってもう百年以上経つが、おかげで屋敷は大学卒業時から肉体年齢をとらず、今でも外見は若いままだ。

　リイカは髪が伸びた程度で出会った時とほぼ変わらない。
「大丈夫か」
「ああ」
　血液のタブレットを吐き出さなかったリイカに優しくキスをすると、彼は屋敷の首に腕を回して続きを強請った。
「……盛らせるなよ」
「今日は調子がいいから、したくなった」
「それでまたダウンして嫌なタブレット飲む羽目になるんだから自重しろ」
　叱ってみせても力が充満しているリイカは魅力的な芳香を放っていて、屋敷は欲望が刺激されるのを感じていた。それが恨めしくもある。この恋人は、何回キスをしても何回身体を結んでも、いつまで経っても魅了してくるのだ。
「徹……」
「あー、もうっ！わかった。わかったよっ」
　午後の診察に間に合えばいいと自棄な気持ちになって屋敷はリイカを再び抱き上げてベッドに逆戻りした。
「お前、人間だったら俺はもう百歳以上のじじいだぞ？少しは養生させろよ」
「その身体で何を言うか。昨日だって乗り気だっただろう？恨めしそうな目で見るなら、私の身体の中を見てみるがいい。お前が出したものが未だ残っているぞ」
「お・ま・え・はっ！」
　足の間、屋敷のものが入る部分を示すリイカに屋敷は真っ赤になって彼に覆い被さった。
「そうやって煽って、乱暴にされるのが好きなんて変態じゃないのか？」
「最初、乱暴にしたのはどちらだ」
「うっ」
　リイカと血液提供の契約を結ぶのに必要なのは、お互いの体液の交換だった。
　当時、あまりその辺について知らなかった屋敷は「やっちゃえば問題ないですよ」
　などと軽い神坂に、魔物であるリイカですら抵抗できない拘束道具を屋敷に渡し、ことに及ぶように促した。
　当然、リイカは抵抗したが屋敷も彼の命を助けるのに必死だったし、リイカだって屋敷の気持ちはわかっていたので最後は拘束されて行為を受けた。
　見ようによっては強姦だったなと、屋敷は今も悔いている部分があるのだが、「私は乱暴だったり激しいのが好きだな」
　リイカは何かに目覚めてしまったらしく、わざと屋敷を煽っては暴力的に身体を拓かれるを好むようになった。
　元々気が優しい屋敷としては恋人に乱暴なまねはしたくないし、うんと甘やかした行為を好んでいるのだが、リイカといると自分を上手く抑えられずについ彼の望む通りにしてしまう。
　もう数え切れないほど及んでいる行為で、屋敷が最後まで理性を保っていたことは数えるほどしかない。

「お前、絶対身体に何かあるぞ。俺だっていい加減、お前に耐性がついてるんだから毎回おかしくなるはずなんてないんだ」
「……九曜（クヨウ）に薬を仕込ませているからな」
「はあっ？」
　促されるままに身体を乱暴に繋げた屋敷は、組み敷いた恋人からの百年以上経ってからの衝撃的事実に思わず引いた。
　九曜は美しい蝶の魔物で、現在は希少種に指定されているらしく狩られる危険性があり、幼い頃に親元からリイカが預かり保護している。生まれて千年は経つらしいが見た目は高校生くらいで、リイカと屋敷の世話をしている。
「九曜にお前の理性を飛ばす薬を盛らしている。なんだ、気付かなかったのか」
「気付くか、馬鹿っ！」
「医者の癖に不用心だな」
「ガキに薬盛らせる恋人がいるかっ！」
　沸き上がる怒りに任せてリイカを虐げると、逆に彼は喜んで笑みを浮かべる。
　美しい顔をしているので力での暴行は出来ないが、性的な暴行をしていると思うと、屋敷は薬のせいだとわかっていても倒錯的な気分になって理性が揺さぶられるのを感じる。
「くっそっ。危うく自分が変態なんじゃないかって数十年悩んじまった。時間を返せ、馬鹿野郎っ」
「時は金なりだからな。まあ、思索するのにいい練習になったじゃないか」
「黙れ、変態っ。澄ました顔して、お前はとんだやつだな」
　リイカはけたけた笑いながら息を弾ませる。それは美しくて、屋敷はこんな変態でも惚れているから俺の負けだと溜息をついた。
「まったく。時間が戻せるならあの時に戻ってお前を最初から抱けばよかったよ」
　行為の最中で血液の力が切れたのかぐったりしてしまったリイカに、屋敷は慌てて血液を補給させ最後までして落ち着いたところで彼は愚痴を漏らし始めた。
「つうか、神坂さんが悪いよな。お前が俺のこと好きだって一言言ってくれればお前の口に猿ぐつわしないでまともに話し合って解決。それで抱くっていうのも出来たんだろうに」
「神坂はそこまで親切なやつじゃない。それに……」
「それに？」
「当時のやつは私に怒っていた」
「なんでまた」
　唯一と自分たちで言い合っているだけあって、神坂とリイカは仲がいい。それは間近で見てきた屋敷も一時期あらぬ疑いをかけたくらいのものだった。
　べたべたしているような仲ではないが、幼馴染みという独特の雰囲気があるのだ。リイカは他を寄せ付けるタイプではないのでなおさら神坂の存在は目立つ。
「私の名前を言ってみろ。日本人名だ」
「小ヶ谷リイカ？」

「カタカナという独特の発音で言ってみろ」
「……オガヤリイカ……。あ」
　尾が槍烏賊。神坂は「いかちゃん」と、あだ名をつけた。
　日本人としての魔物の名前は、日本の魔物を取り仕切っている神坂が独断と偏見で決めている。
「あいつは洒落が好きでな。私は本名も含んでいるから不愉快で、喧嘩になった。趣味が悪いと罵ったら機嫌が悪く、それが当時だ」
「なるほど」
　日常の中で、また一つ謎が解けた。

番外編〇六：ブラコン兄の冒険記

　俺の弟は可愛い。性格は、あまり可愛くはないが容姿がそこらへんの女の子より数段可愛い。
「佑（タスク）、この間連れていた女の子、誰？」
　などと付き合っていた彼女に問い詰められるくらい、弟は可愛いのだ。
「なあ、やめておけば？お前、それは迷惑だよ」
「五月蠅いな。俺は行くんだ。今までバイトが続かなかった智がどんなところでバイトをしているのか見に行く」
「このブラコンが」
　友人が呆れているが、俺はそんなことより弟のバイト先が気になった。
　弟曰く、「普通の金融会社だよ。僕は経理」
　いつものように、まるで俺を五月蠅いと言いたげに言ってきたが、普通の大学生に一つの会社の経理を任せるところがあるのだろうか。いくら力になってくれる人がいるからって、弟は未だ学生で、バイトなのに。
「兄さん、何してるの」
「うわああっ」
　しまった。考えながら後をつけていたら見つかってしまった。
　弟は胡散臭そうに俺を見て「僕のバイト先に興味があるんでしょ。来るのは勝手だけど、見たら直ぐ帰ってよ」
　邪魔だからと、大きい目を嫌そうに細める。
　これに、俺はちょっとほっとした。
「なんだよ。来てよかったなら最初から言ってくれよ。兄ちゃんはお前から紹介されるのを待ってたんだ」
「……あのね、普通自分のバイト先に家族を招待するって飲食業とかくらいだよ。僕は経理で、バイト先は金融会社の事務所なんだから招待するなんてあり得ないよ。あと、兄ちゃんって言わないでくれないか。僕は兄さんって言ってるんだから」
　弟は本当に口がよく回る。俺は物凄く落ち込みながら後をついて行った。
「金融会社、……スチャラカぱらだいす。個性的な名前だな」
「個性的なのは社名だけじゃないよ」
「そうなのか」
　興味がわいてきたのでワクワクしながら足を踏み入れた。
「智、いらっしゃい」
「・・・・・・」
「あれ？そちらはどなた？」
「兄です」
　俺は目の前の男を見て、言葉を失っていた。
「おい、佑っ」

「えっ。あ、うん……」
「挨拶くらいしろよ」
　弟は不出来な兄で済みませんと俺の代わりに頭を下げる。なんと言うことだ、尊敬される兄としては失格ではないか。
「初めまして。鷺沼佑と言います。智がお世話になっています」
　不自然に見えないようににこやかさを出して挨拶すると、俺の言葉を失わせるくらいの美形な男は「神坂築です。ここの社長をしています。鷺沼くんは大変よく働いてくれていて、助かっているんですよ」
　紅茶色の瞳を微笑ませて挨拶を返した。
「雪嶋。お茶、一つ追加」
　奥に声をかけた神坂社長は、俺に客用と思われる長椅子に座るように促した。
「金融業のバイトなんて怪しいと思われますよね。ご兄弟が心配なのはわかります」
　俺は別の心配をし始めた。
　こいつの目は、何となく危険だ。しかもさっき、弟を名前で呼んでいたではないか。それも親しげに。あれはバイトにする感じではない。
「お茶をどうぞ……」
「・・・・・・」
　ぺこっと頭を下げて、出してくれた相手を見て俺はまた言葉を失った。
「あの、僕が何か……っ」
「雪嶋下がれ」
　北欧系の男は怯えながら下がっていった。その男の綺麗なこと。絵でもあんな綺麗な男は見たことない。
「どうかしましたか？」
「あの、ここは本当に金融会社なんですよね……」
「そうですよ」
　断言されても、俺は疑いを濃くするだけだった。
　仕事に没頭している智の直ぐそばのデスクに座る男も目を見張るくらい美しく、受付で俺に流し目を送る女は妖艶すぎるくらいの美貌だった。
　ホステスとホスト。ここはクラブか。
　俺の中にいろんな考えが浮かぶ。智はどうしてこんなところで働けているのだろうか。まともな精神なら、彼らを見て目を奪われっぱなしで仕事なんて出来はしない。
「こんにちは。定期点検にきました」
「手代木（テシロギ）さん」
「雪嶋さん、……会いたかったです」
「未だ別れて数時間ですよ」
　雪嶋という綺麗な男は、手代木というまたも派手な美形の男に近寄って何か話している。その雰囲気を見ていて、何となく恐ろしいものを感じた。

　思わず引いていると、神坂社長が渋い顔をして「雪嶋、慎めよ」
　物凄く低い声で言う。
　雪嶋はびくっと身体を竦ませ、手代木は苦笑して彼をかばうように奥に連れて行った。
「済みませんね、常春馬鹿なんです」
「いや、あの……、まあ、はい……」
　聞かないでおこう。聞いたら俺は倒れそうになる事実を知るかもしれない。
「雪嶋ごときで驚いていたら、お兄さんは自殺したくなるかも知れませんね」
「はい？」
「なんでもないですよ」
　思わせぶりなことを言うな。
　俺は神坂社長から弟の仕事内容を聞いて、彼が職場でどのような人間関係を築いているのかも聞いた。
　なるほど、ここは弟の容姿について文句を言われるような外野の進入はないし、弟ものびのびと敏腕ぶりを発揮しているらしい。
「用が済んだなら帰って。マジで邪魔」
「こら。お兄さんを邪険に扱ったら駄目だよ？」
「……早く返した方がこの人のためですよ。今日は陛下がいらっしゃる予定なんですし」
「へいか？」
　どこぞの貴族がお忍びで来るのか、ここは。
　小首をかしげていると自動ドアが開いた。振り向いた後、俺の記憶はない。

智：「あー、気絶しちゃったよ。やっぱり陛下の魔力って凄まじいんですね」
陛下：「……私は何もしていないのだが」
イデア：「いるだけで毒に近いんだよ。俺の加護がない人間は死ぬか気絶するかだろ。気絶するだけ智の兄ちゃんは運がいいな」
神坂：「こうやってみるとお兄さんとあんまり似てないね」
智：「似ていないで結構です。こんなに煩わしい存在と同じになりたくありません」
雪嶋：「智くん、お兄さんに厳しい……」
手代木：「雪嶋さんはシスコンですからね」
蘭林：「シャチョ、この人どうするンデスカ？……私、クッチャッテイ？」
神坂：「ランラン駄目。取り敢えず魔王陛下とイデア陛下、記憶を消したいんですけど、手伝ってくださいませんか？」
陛下：「わかった」
イデア：「……仕方ねえな……」

　何か、夢を見ていた気がする。
「兄さん、頭平気……？」

「あれ？智。お前、バイトは？」
「出かけに兄さんが倒れたから休んだんだよ。もう、社会人の癖に休みだからってはしゃいで足を滑らして頭打つとか、本当にやめて。迷惑」
　弟は心底嫌そうにバイト先の仕事だろうか電卓を叩いている。
「兄ちゃんは今日、智のバイト先に行こうと……あれ？行ったような気がしたんだけど。行ったよな？」
「はあ？兄さんは気を失っていたんだから行けるわけないじゃん。リアルな夢でも見すぎだよ」
　思い返して、そうだよな夢だよなと思った。
「リアルじゃないんだよ。なんかな、みんな美形で。あと、記憶が途切れる前に見た、男なんだか女なんだかわからないがとにかくビッカビカのやつが」
「夢だよ、夢。まだ眠ってれば？……僕、自分の部屋に戻るわ」
　弟は聞いてられるかと部屋に戻って行った。
「……夢だったのか」
　納得と言えば納得できる内容に、俺は一人頷いていた。

番外編〇七：ボーナス査定はハイキング

　金融会社スチャラカパラダイス経理アルバイト社員、鷺沼智は何事にも動じない精神を持ち合わせているが、今日ばかりは驚きの連続だった。
「だ、誰かっ。生きてる人、返事してくださいっ！」
　智の声は虚しく山彦となって消えて行った。
「くっそっ。あの馬鹿のせいで」
　数時間前のこと、「今から冬のボーナス査定を行う」
　社長の神坂築が言い出した時、古参の御厨剣は持っていたアルミ製のタンブラーを思わず握り潰した。
「わー、ボーナス査定ですか。日本支社に来てから初めてだ」
　パソコンで人事の予定を組んでいた雪嶋雪人はにこにこして、「アタシ、ほしい車があるからボーナス増やしてホシイノヨネ」
　受付の蘭林香は綺麗なネイルにうっとり見ほれながら呟く。
「ぼ、ボーナス……増やしてほしくないから査定に参加しないって言うのはないの……」
「みくりん、何を言っているんです？……え、参加？」
　遠藤円が何に参加するんだと小首をかしげ、「なにかやな予感がしてきたんですけど……」
　近江近衛が言った瞬間、社内は光に包まれて全員その場から姿を消した。
　智が目を覚ましたのは山の中だった。
「皆さん。よくぞいらっしゃいました」
　何処かで神坂の声がするのに、耳を澄ませる。よく見ると初めて見る人の姿もあり、全員が全員スチャラカのメンバーだと言うことだけはわかる。
「今からボーナスの査定を始めます。この山の何処かにある小屋についた順番でプラスの額が決まります。ルールは簡単ですね！」
「社長！前回のように死者が出るのは困ります！」
　前回のことを知る誰かが何処かで叫んだが「安心してくれ。今回も逃げ場はないが、死なないように半殺し程度のトラップで我慢しておいた。そして人間が二人いるので、彼らのために魔物である君たちの能力は使えない」
　神坂はいっこうにこの馬鹿げた企画をやめる気配がない。
「人間が、二人……？」
「いてて……っ」
「手代木さんっ？」
「あ、智くん」
　手代木は仕事中だったのだろう、作業着のままで立ち上がった。
「か、神坂社長っ？なんで俺がこんなところに連れてこられるんですかっ？」
「今回、トラップの中で火を使うものがある。雪嶋は死ぬかもしれないので手代木くんに代理として出てもらうことにした」

　俺仕事中ですよと、手代木は頭を抱えていたが「……雪嶋さんに何かあったら大変だもんな……」
　と、恋人馬鹿はそんなことを呟いて参加を承諾した。
　それから、魔のハイキングが始まった。
「さ、智くん……」
「遠藤さん！よくぞご無事で！」
　着ていたスーツがぼろぼろの遠藤はゼーハーと荒く息を繰り返し、「まさか人間の状態で、それも素手で熊と戦う羽目になるとは思わなかった」
　汗を拭う姿を見て、それでも普通の人間が勝ったことに智は驚愕を覚えている。
「おうめ。……無事かな。あいつに何かあったらどうしよう」
　熊を倒した人狼は吸血鬼の恋人を思い弱気になっていた。
「大丈夫です。さっき、トラップで眠りに落ちていたのを見つけたので木に寄りかからせておきました」
「有り難う、智くん」
「僕が心配なのは手代木さんです。僕より先に行ったのに、未だ社長から一着の知らせがこないんですよ」
　人間の手代木に何かあったとは思いたくはないが、智も遠藤も万が一のことを考えて身震いした。
「だ、大丈夫だよ。彼には雪嶋の加護がついてる。……一回くらいなら死にかけてもなんとかなる、はず……」
「はず……」
　遠藤の励ましも暗い材料にしかならない。
　二人は無言のまま道を進んでいたが、「誰か～っ！」
「この声は！」
　智が探してみると、見たこともないくらい大きな木の枝に宙づりにされている手代木を発見した。
「大丈夫ですかっ？」
「頭に血が集中してきて気持ちが悪い……」
「待ってろ！」
　遠藤が力任せに枝を引き千切る。トラップにかかった手代木は木の葉の上に着地した。
「……有り難う、遠藤さん。うう、くらくらする……」
「僕たちもちょっと休みましょうか」
「そうだな……」
　闇雲に歩き続けて数時間、二人は体力の限界だし手代木は宙づりにされていた後遺症でぐったりしていた。
「どうする？このまま誰かが行き着くのを待つか？」
「僕、バイトなんでボーナスとかどうでもいいですから……」

「雪嶋さんには悪いけど、俺は未だ死ねないし、帰ってからの仕事もあるんだよな……」
　三人は溜息をついた。もうどうでもいいという雰囲気が漂っていたが、「あれ？雪嶋さんの声がする」
　手代木が立ち上がり、「おうめの悲鳴がっ」
　遠藤も続く。
「……フフフ。手代木くん、エンちゃん。恋人の命が惜しくば放棄などしないことだな……」
「あんた、ドラマの見すぎだろ！」
　悪役よろしく台詞を吐いて突然姿を現した神坂は「智～、頑張ってね～」
「くたばれ、馬鹿っ！」
　智に罵られてまた姿を消した。
「畜生。なんて社長なんだ。俺より弱かったら、せめて社長じゃなかったら殺してる」
「雪嶋さんに何かされたらたまったもんじゃない」
　遠藤と手代木は歯噛みして歩き出した。智も後に続く。
　それから更に数時間、夕暮れも差し迫ってきた時、ついに「遠藤さん、避けてっ！」
「うわああぁああぁぁぁあああ！」
　智の叫びも虚しく、遠藤がトラップに引っかかり脱落した。
　手代木は遠藤に助けられて無事だったが、「あの人は全員殺してボーナスの査定なんてどうでもいいんじゃないか……？」
　智も薄々気にしていたことを呟いた。
「ただの暇つぶしにしてはやることが酷すぎる」
　そういえば、途中で針の山に引っかかって串刺しになっていた社員や、骨だけになってしまった社員、その場で爆発など、もはや自主規制がかかるほどの惨憺たる現場になっていっているのを目撃している。神坂が全員を気まぐれに消し去ろうとしていたとしてもおかしくはない。
「……今度、魔王陛下と女王陛下にお会いした時に叱ってもらうように絶対言おう」
「叱るだけで済ますなんて、智くんはこんな時でも心が広いな」
　手代木は呆れたように言うが、智は苦笑した。
「僕、少し感謝しているところもあるんです」
「かんしゃ……？」
「僕はバイトなのに、社員の皆さんと同じ扱いをしてくれてる。そのことが、少し嬉しくて。それに、手代木さんには迷惑でしょうけど、人間の手代木さんを混ぜたのも、きっと僕のためだと思うんですよ」
　実は智はスチャラカの従業員の中で一人だけ人間だと言うことを気にしていた。普段は何も言わないし、思わないようにしているが、彼らの本業に関われないことなど引っかかることはいくらでもある。
　神坂に不満を漏らしたところで何にもならないので盛らさないが、彼は智をよく見ていたのだろう。
「……智くん、絶対つこうな」

　手代木が杖代わりにしていた枝を捨てた。

「あー、人間二人組が一着か。凄いなあ」
　お菓子の家で待っていた神坂はずたぼろになった二人を笑顔で出迎えた。
「約束通り、ボーナスには色をつけよう」
「・・・・・・」
　季節外れの暖炉では薪がぱちぱち燃えている。
「……手代木さん、もう限界です」
「俺もだ」
「え？なに……？」

　遠藤たち、一般社員がやっとの思いで小屋に辿り着いた時、神坂の姿はなかった。
「智くん、手代木くん、社長は……？」
「さあ」
「知りません」
　煙突には黒い煙。燃え残った布の端。
　人間は魔物より恐ろしいかもしれないと、魔物たちは思った。

後書き：牡丹えび

　初めましての方も、そうでない方も。こんにちは、牡丹えびともうします
　今回は自著「黒い名刺に気を付けろ！」を目に留めてくださり有り難うございます。パブー様より、三冊目の電子書籍です
　「黒い名刺に気を付けろ！」は以前「社員編」という形で出ているのがあるのですが、前回と今回は登場人物が重なるだけで話としては別のものになります。こちらだけ読んでくださっても内容はわかりますのでご安心ください
　今回は話が複数に分かれたので個別に書いていた時の感想を後書きに代えさせていただきます

・「バイト編」
　前回は社員編でした。その以前の話になり、社員編では大学生だったバイトの智が高校生の話で、メインカップルも社長と智になっています
　智が何故バイトを始めたのか、何故社長とくっついたのか、スチャラカとはどんな会社なのか、等々、前回謎だった部分が明らかにされているとかいないとか
　書いている時はあまり考えて書いていないのですが、終わって読み直したら、「あら？なんかあっさり墜ちた」と思うくらいあっさり智が神坂に惚れてしまいました
　作中に出てくることわざの超訳ですが、あれはえびが初めてあのことわざを知ったときに抱いた感想です
　正確な心頭滅却云々とは違いますので引用は避けてください
　初登場など、いましたがどうして社員編にはいないのか
　そしてスチャラカの社名の由来とは
　書いてみたいエピソードがまだあります

・「強盗ＶＳブチ切れ死に神」
　題名からわかる通り、強盗に入られるお話です
　日本は滅多にこういうことはありません。スチャラカ限定
　えびは恋人馬鹿がとにかく好きで、有料版も無料版も恋人たちのどちらかは馬鹿にしてしまいます。この話は神坂が馬鹿になってしまいました
　神坂は本当はかっこいい人なんですよ、とフォローを入れたいのですが本編もかっこいいという感じではなかったので書き方を工夫した方がいいかなあと少し反省してしまいました

・「魔王陛下夫妻と記念日」
　バイト編から一年経った話になります
　今回も魔王陛下たちに関わる話は前後篇になりました
　読んでいただくとわかるのですが、話の接続部分で切らなくてもいいかなと思ったのですが、ページの都合上、魔王陛下のご登場で切ることにしました

女王陛下の魔王陛下溺愛ぶりをもうちょっと出したかったのですが、今回は魔王陛下の「恋がしたい」理由を書きたかったので大幅にカットしました
前回の番外編では明かされなかった魔王陛下の恋を望む理由と、女王陛下に対する想いが表現できたらいいなあと思いを込めて書きました
前回の番外編より少しいやらしさは薄め、でも想いは濃いめ

・「仄かに光り指す帰り道」
少し暗い話です。神坂視点の話になります
自分の身近にいる人間の命を狩るのが死に神、というところから、そうすると恋人の智の命も神坂が狩るんだなと思って書き始めました
実際に死に神と人間が恋に落ちたらこういう結末になることもあり得るのではないか。フィクションだから書ける世界です
神坂の気持ちになると切なくて、しかしあまり暗くならないようにしたつもりです
ＢＬはあくまでファンタジーですし、このシリーズはどちらかと言うとコメディー路線を走らせたい！と思っているので

・「日常の謎」
初登場だった小ヶ谷と屋敷の話です
実は二人の話を次回の主題で書きたいと思っていたのですが、時代背景や登場人物設定を考えるとシリーズ名とは関係なくなってしまうことから断念。なので、代わりとして生まれたのがこの番外編でした
そして、リイカはMだと思います。屋敷との初めてがかなりショッキングな感じで終わったのでそっちに目覚めたとか……
恋人は優しく扱いましょう
一方の屋敷は医者という職業ですが、不老不死に近いので職場を転々としています
智の高校にいたのも、リイカがいたのでちょろまかして赴任しただけです。智が大学生になった時にはリイカは当然卒業しているので別の職場にいます
社員編では海外にいるのでこの二人は出てこない、と。あ、答え書いた
九曜には白銀（シロガネ）という恋人がいるという設定ですが、全然掠れもしませんでした……

・「ブラコン兄の冒険記」
この話は毛色を変えて、一人称で進んでいくお話になりました
智の兄が主人公です
可愛い弟には邪険にされていますが弟ラブの社会人
神坂に対して不穏なものを感じたのはきっと野生の勘かな？弟愛のなせるわざかな
この話では智は大学生なので、社員編で雪嶋とくっついた手代木も出しています

・「ボーナス査定はハイキング」
　以前、サイトをやっていた時にこの話の基礎を書いたことがあり、今回はその話を元に全面書き直して今回の最後としました
　メルヘンチック企画として「ヘンゼルとグレーテル」を題材にしたのですが、きっとわかっていらっしゃる方はいないかと
　人間が一番強かった、それだけの話になってしまいました

　後書き、長かったですね
　前回の社員編が好評かどうかわからないのですが、閲覧数が百五十人様を突破したので調子に乗って有料版を書き上げるよりも早くこちらを書き終えてしまいました
　基本ウェブで十三ページ（後書きを入れて十四ページ）を目指していて、バイト編が前回のように九話書けずに焦ったのですが、なんとかなってよかったです
　次回の無料版は十月になります
　内容は「黒い名刺に気を付けろ！」の短編集です。現在執筆中です
　魔王陛下たちの話や、雪嶋たちのその後、智たちのその後、小ヶ谷たちのその後などを書いています
　甘めの内容がいいなあと思っています
　有料版の公開は九月はお休みをいただきます
　実は途中までしか書けず、足踏み状態なので品質のために書く時間を多くとることにいたしました。少なからず見てくださる方がいらっしゃる中で心苦しいのですがご了承ください

　話を戻して、無料版はずっと全年齢の健全（？）で続けていきたいと思います。プロフィールに書いていたとおり次回以後は不定期になるかもしれませんが、これからもよろしくお願いいたします
　出来ればご感想もお待ちしています。リクエストなどがあれば喜んで書かせていただきます。勿論、無料です
　後書きが長かったので、お詫びとしましてこの後にショートショート小説を書かせていただきました
　智が大学生、雪嶋と手代木がくっついた後、そして久しぶりに小ヶ谷がスチャラカにやってきて、陛下たちとお茶をというごった煮のようなお話です

　追伸：ツイッターやってます。忙しさにかまけてほぼ呟いていませんが、自著裏話やプライベッターにて番外編やオリジナル短編を掲載しています
　@buttonebi
　人見知りなので自発フォローはしていませんがフォロバはしているので是非！
　タブレットの使いすぎによる腱鞘炎と姿勢の悪さからくる頸椎症に悩まされる、牡丹えびで

した：二〇一五年〇八月下旬

「ま、眩しい……」
「毎回のことながら」
　手代木がお茶を飲みながらたじろぎ、智は感嘆の溜息をつく。
「鷺沼は茶道部でもないのにお茶が旨いな」
「私は智の煎れるお茶が好きだ」
　小ヶ谷が日本茶を飲み、魔王陛下が御茶菓子をつまむ。背後では女王陛下が神坂と紅茶を飲んでいて、近くでは雪嶋と遠藤と近江、御厨と蘭林が羊羹に舌鼓を打っていた。
　その一同の姿の麗しいこと、人間の二人には目に毒である。
「小ヶ谷先輩はいつまで日本に？」
「明日の午後には戻る。えさが喚くからな」
「徹くんのこと未だそんな呼び方してるんだ。家の中だといちゃついてるって評判なんだけど」
「……誰からの評判だ」
　小ヶ谷は嫌そうに顔を歪めた。
「智、紅茶に合うお茶菓子ってなんだろう。やっぱクッキー？」
「確かスコーンとかもありますよ。でも僕は日本茶方面は詳しいんですけど、他はさっぱりで」
　女王陛下は「旦那さん、日本茶の方が好きだよね？」
「ああ」
「じゃあどうでもいいか」
　何処までも魔王陛下ラブの彼は紅茶をやめて日本茶を飲み始める。ちなみに五杯目だ。
「……総理大臣より凄い人と一緒にいるって言う実感が掴めないな……。見間違いかと思うくらい綺麗すぎるからか……」
　手代木だけは雪嶋の烏龍茶を飲みながら陛下たちを観察して、己の置かれている状況をしみじみ考えていた。智も相当な精神力の持ち主だが、彼も相当タフである。
「人間、不思議なことくらいなんてことないなあ……」
「魔物の世界の国王陛下に会う機会があるとは思いませんよね」
　人間二人はお茶をすすりながらそれぞれ出会いについて考える。
「智、なに手代木くんとわかり合っちゃってるの？そのまま変な仲間意識持っちゃ駄目だよ？嫉妬しちゃうよ？」
　既に嫉妬している神坂を、智は馬鹿がと呆れた。
「心配しないでください、神坂社長。俺は雪嶋さん一筋ですから」
「手代木さん……」
　雪嶋が恥ずかしがって室温を下げる。
「一筋っていい言葉だな……。俺はおうめ一筋」
「エンちゃん、こんなところでやめて……」
　遠藤の宣言に近江が真っ赤になった顔を隠す。

「なんだ、このラブラブな状況は。俺とランランが浮いている」
「アラー、じゃあアタシタチもどう？おじさん……」
　御厨は誘惑されて苦笑する。
「ふ。俺もかみさん一筋だからな。それにランランはまだ小娘よ」
「なんですってー！」
　わいわい賑やかな午後の昼下がり。
「あ、お客さんがきましたよ！」
　智が言っても誰もお茶会をやめようとはしなかった。